國語讀本

改訂版

卷一

4a
810
昭5

41484
教科書文庫
4
810
41-1929
20000
82060

資料室

昭和四年三月廿五日
文部省檢定濟
中學校國語科用

國語讀本 卷一

昭和改訂版

文學博士 上田萬年
榮田猛猪
鹽野新次郎
共編

広島大学
教
82060
図書

4a
810
B85

國語讀本 卷一

目次

一 空は青雲（詩） 北原白秋 一
二 人生の曙 大島正德 四
三 木のぼり 前田夕暮 八
四 春風四月 芳賀矢一 一三
國花 芳賀矢一 一七
五 猫の作戰 夏目漱石 一七
猫と鳥 夏目漱石 二五
六 犬ころ 二葉亭四迷 三〇

犬三句　三七

七　巴里の五月　島崎藤村　三七

フランス印象記　吉江孤雁　四一

八　親ごころ　四二

一　酒勾なる二兒へ　大町桂月　四二

二　米澤なる四麿へ　五十嵐力　四五

九　子を見るの明　柳澤淇園　四八

一〇　人間の大小　薄田泣菫　五一

一一　叡山の鳥　五五

その一　若山牧水　五五

その二　高濱虚子　六〇

一二　鸚鵡（詩）　河井醉茗　六五

一三　英雄名はリゾー　（東京朝日新聞）　六七

一四　膽力　嘉納治五郎　七六

格言三則　八二

一五　海舟の苦學　（海舟言行錄）　八二

一六　水郷めぐり　高濱虚子　八五

一七　乃木大將の舊宅　服部他助　九九

和歌二首　一〇四

一八　蒔かぬ種は生えぬ　丘淺次郎　一〇四

	諺語三則		一一〇
一九	朝（詩）	川路柳虹	一一〇
二〇	湖山長者	五十嵐力	一一三
二一	燈臺守	藤井乙男	一一八
二二	海のスコール	水野廣德	一二三
二三	無線電信	水上瀧太郎	一三一
二四	智慧伊豆	大町桂月	一三五
二五	富士山	金子元臣	一四一
	和歌三首		一五二
二六	母と蘆	西條八十	一五二

	迷兒（詩）	西條八十	一五八
二七	ペンギン	杉村楚人冠	一五九
二八	草に祈る	櫻井忠溫	一六六
二九	障子	鶴見祐輔	一七六
三〇	良寛禪師	北原白秋	一八〇
	和歌三首		一八七
三一	安井息軒	森林太郎	一八八
	和歌二首		一九六
三二	好きで勉强	三宅雪嶺	一九七

──比叡の峰（岩田正己筆）──

北原白秋　福岡縣の人、名は隆吉、詩人。

國語讀本　卷一

一　空は青雲

北原白秋

空は青雲、わしらは若い、
岩に子鷹の仰ぐよだ。
　さうだ／＼、巣だちの若鷹だ、
いまに風切る鷹の羽だ。

海ははる／＼、わしらは若い、

波に快走船の揺れるよだ。
　さうだ〳〵、南の風待だ、
　いまに乗越す波の穂だ。

古い國柄、わしらは若い、
山と川とは揺籃だ。
　さうだ〳〵、生まれの生えぬきだ。
　いまにお國の後繼だ。

時はよいとき、わしらは若い、
若い日本の起つ時だ。
　さうだ〳〵、世界のしのゝめだ、

　いまにかゞやく朝焼だ。

何が辛かろ、わしらは若い、
心だてなら玉のよだ。
　さうだ〳〵、鋼鐵のひゞくよだ、
　地から噴出す眞清水だ。

伸びろ、耐へろ、わしらは若い、
いづれ柱になる木だ。
　さうだ〳〵、見てゐろ、これからだ、
　いまにお國を背負ふ木だ。

大島正徳　神奈川縣の人、倫理學者、東京帝國大學助教授。

二　人生の曙

大島正徳

少年はいつまでも少年ではゐない。やがて青年となり大人となる。大人となれば、世の中に對して人たる責任を身に負はねばならない。人がこの責任を感ずるやうになるのは、小學校を卒業した頃からで、例へば、曙の光がほのぼのと山の端から射すやうに、自分の心に段々と世の中が見え初めて來る。

小學校を卒業すると、先づどうしてこの世に立つて行かうかと考へる、何になり何をしたらよいか、自分の性質は果してどんな仕事に適してゐるかなど考へる。また世の中の事に對して、善い惡いの分別もついて來る。こゝに自己修養の必要を感じ、志を立てねばならないことを覺り、また自分の任務を知り、さてはこの社會・國家を改善して行かうなどといふ大きな望をも起す。かうして少年の心は人生の曙に目覺めるのである。

曙の空は爽快であり多望であるやうに、人生の春に立ち曙に臨んだ少年の心は、何の蟠りもない極めて望の多いものである。同時に、少年の多くは空想家である。したいと思ふことが數限りなく心に浮び起つて、恰も夏の雲の湧き出るやうである。けれども、人にはそれぞれの性質があり、事情があり、境遇があつて、誰しも思ふまゝに何事でもする

覺(覚)　湧・涌

職織識

わけにはいかない。そこで自分の性質・事情境遇を省み、また父兄・長上とも相談して、世に立つて行く方針を定めねばならない。商業なり工業なり農業なり、その他何にせよ、一定の職業を執つて世に立つことを心に決めねばならない。そして愈、或一定の職業に志を立てたならば、前人の歩いた道を辿るばかりでなく、自分の正しい新しい考によつて、その執るところの仕事を改良し、自らも進み、世をも進めて行く覺悟がなくてはならない。

さて、曙に目覺めた少年は、先づ心を靜めて、人生の最も尊いことは何であるかを考へて見るがよい。抑、人生の最も尊いことは、一個の人間として立派なものになることである。人は、富あり名譽あり學問ある人に對すること、或は羨み或は妬むけれども、心から感ずることは殆どない。然るに尊ぶべき立派な行のある人に對すること、誰しも心の底から感ずる。羨みも妬みも忘れて、たゞその人を仰いで、尊く懷かしく感ずるものである。故に我々は、たゞ富あり名譽あり學問ある人となることばかり務めて、世の中の人をして單に羨ましめ妬ましめることを願ふよりも、むしろ立派な行をして、心から感じさせるがよい。人を感じさせる力は、他人の心に刺激を與へ生命を與へるものである。我々は、正心誠意、自ら善に進み、人を愛し、人を敬ひ、人の善を喜ぶやうな立派な人間となることが肝腎である。こんな人が眞

譽(誉)　學(学)　腎賢

前田夕暮　名は洋三。神奈川縣の人、歌人。

に他人を感じさせる尊い人である。

要するに、自分の事情・性質等を考へて、自分の方針を一定すると同時に、その境遇・職業の如何に拘らず、人間として立派な一生を送らうと覺悟するのが、人生の曙に立つものの、第一に心がけねばならないことである。

（公民道德）

三　木のぼり

前田夕暮

青桐の幹は青くてすべ〳〵してゐる。まして二十年生ぐらゐの若木の快い幹の肌ざはりは、冷たくて、たつぷりと水をふくんでゐる。樹皮をすかして青い纖細な神經が感じられるほどである。

背脊

私の子供がその青桐の木に登らうとしてゐる。子供は全身的に幹に抱きついて、背をまるくして三四尺ほどやつとの事で登る。若木の青桐は、空にひろげた若葉を、梢の方でびり〳〵と輕くふるはしてゐる。

子供は顏を眞赤に染めて、瞳を黒く光らせながら、また五六尺のところまで登つて、暫くぢつとこらへてゐたが、するするとすぐに滑り落ちてしまふ。

子供は滑り落ちてしまふと、暫くの間は胸を小鳥のやう

兩(両)

にふくらませながら、樹を高々と仰いでゐる。

　子供は意を決したもののやうに、上着を地面に投げつけて、今度は勢ひ猛に登りはじめる。　兩手でしつかり樹を抱きしめて、靴の踵を樹の肌につけて、遮二無二登つて行く。が、子供の體は二尺登つては一尺ずりさがり、三尺登つては二尺ずりさがる。　そして五六尺の高さまで行つて力が盡きたのか、またする〱と地上に滑り落ちるのである。

　もうあきらめてやめるだらうと思つて、私は少し離れたところから見てゐると、子供は靴をぬいで、一二間さきの方へぽんと投出して、跣足になつて、足の裏に砂をまぶしつける。　そして樹に飛びつくやうに抱きついて、からみつくや

若　苦

うな體のうねりを見せてから、うん〱とうめきながら、手も顔も眞赤にして登りはじめる。　私は見てゐて少し苦しくなつて來たので、餘程止めようと思つたが、それでもと、私までが全身に力をこめて、思はず子供と吐く息吸ふ息を合せた。

　子供は忽ち五六尺のところまで登つて、ちよつと考へてゐるやうであつたが、何の造作もなくまたする〱と滑り落ちて、さすがに疲れたと見えて、倒れるやうに地べたに寢そべつてしまつた。　そして寢ながら青桐の梢を仰いでゐるのだ。

　子供は寢てゐる間にすぐに疲勞を囘復したと見えて、忽

腹膓

ち起きあがつて、今度は襯衣もズボンも脱ぎすてて、猿股一つになつて、側においてある支那製の水甕へ片手を入れて、掌で水をすくつて飲んだと思ふと、日光の方に向つて、ふうと霧をふいて、腹を大きく膨らませたり低くしたりしてゐたが、また足の裏に砂をまぶしつけて、ちよつと上を仰いで見て、更に勢ひ猛に樹にとびつく。　青桐は少しゆら〳〵と搖れる。

今度は見る間に六七尺ほど登る。　第一の下枝が頭のすぐ二三尺上のところにある。　子供は滿身汗まみれ、全身朱に染まつて、兩手を長くのばせるだけのばして、幹を抱いたかと思ふと、縮めてゐた足が同時にのびる。　ともう兩手を上にぐつとのばしてゐる。　そして下枝に片手をかけたかと思ふと、ひらりと身を跳らせて、その枝の上に立ちあがつた。　そして私の方を見おろして、「おーい。」といふ大きな聲をして呼ばつた。「おーい。」と私も思はず手をあげた。

青桐の葉といふ葉は、風にゆられながら日の光を受けて、きら〳〵と喜ばしげに光る。

芳賀矢一　福井縣の人、文學博士。大正二年歿。年六十一。

照りもせず　照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき（新古今集、大江千里）

四　春風四月

芳賀矢一

櫻の咲くのは春の末である。　春の日本は水蒸氣が多い。どんよりと曇つて、寒くもなく暑くもない日和を花曇といふ。　夜は照りもせず曇りもせぬ朧月夜「雲霞とまがふ花に

賀茂眞淵　江戸の國學者、明和六年、(約一五〇年前)歿、年七十三。

久方の　「櫻の花の散るをよめる」と題して、古今集春の部に載す、平安朝の歌人紀友則の作。

は最もふさはしい景色である。そよ〳〵と面を吹くや春風。春の特色はどこまでも駘蕩といふ點にあり、温和な所にあり、峻嚴猛烈といふ心の微塵もない所にある。櫻は此の時候に孕まれて咲出づる花である。際立つた特色のない所が、卽ち其の特色である。賀茂眞淵は

うら〳〵とのどけき春の心より
にほひ出でたる山ざくら花

といつた。春の日は永い。

久方の光のどけき春の日に
しづ心なく花の散るらん

櫻は永陽の日に最もふさはしい花である。こゝに大宮人

もゝしきの　奈良朝の歌人山部赤人の作、新古今集の春の部に載す。

よしの山　德川時代の歌人八田知紀の歌。

花の雲　松尾芭蕉の句

鐘一つ　鐘一つ賣れぬ日もなし江戸の春(其角)

の悠揚迫らぬ樣子が想ひやられる。

もゝしきの大宮人はいとまあれや
さくらかざして今日もくらしつ

牛車の歩みおそく花見て歸る黃昏の景、さながらの繪卷物である。

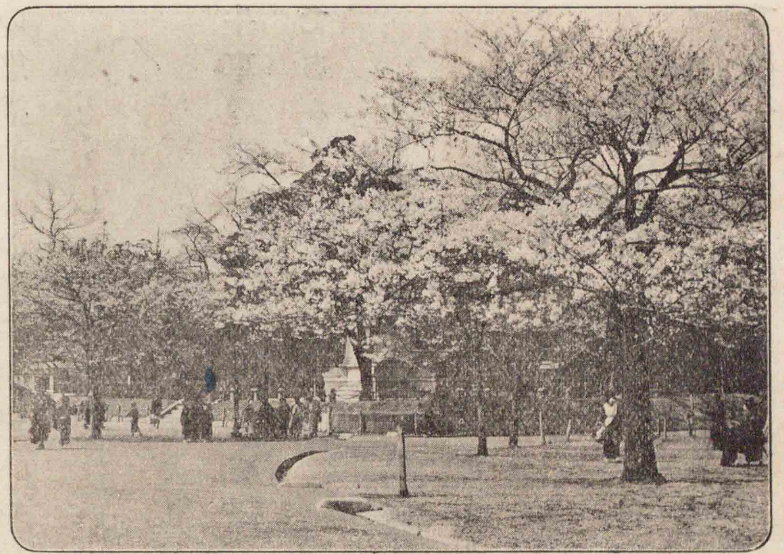
よし野山かすみの奧は知らねども
みゆる限りはさくらなりけり

これは滿山花に包まれた吉野山の景色を詠んだのである。

花の雲鐘は上野か淺草か

これは鐘一つ賣れぬ日もなき大都會の、花に掩はれた光景である。

瓣　辨　辯



櫻は牡丹や薔薇のやうに花瓣を賞翫する花では無くして、木として賞翫する花である。否多くの木を集めて、人はたゞ花中に在つて賞翫する花である。上から下に見て愛でる花ではなくして、下から眺めて愛でる花である。春風四月、日本人はしばし花の世界の人となるのである。

（月雪花）

冶　治

夏目漱石　東京の人、名は金之助、文學者、大正五年歿、年五十。

鼠（鼡）

支那の國花は牡丹である。その濃艶なよそほひは美しいに相違ないが、あつさりとした日本趣味には適しない。香氣鼻をつく薔薇の色も、すて難く美しいものであるが、これも艷冶の態があつて清楚人を動かす野趣に乏しい。しかし薔薇は歐米人の花の王と稱するものである。

（國花―芳賀矢一）

五　猫の作戰

夏目漱石

吾輩はとう〳〵鼠を捕る事に極めた。

元氣旺盛な吾輩の事であるから、鼠の一匹や二匹は、捕らうといふ意志さへあれば、寢て居

表紙（橋本五葉意匠）

挿畫（中村不折筆）

――「吾輩は猫である」の表紙と挿畫――

疊（疊）

てもわけなく捕れる。今まで捕らぬのは、捕りたくないからの事だ。

春の日はきのふの如く暮れて、折々の風に誘はれる花吹雪が、臺所の腰障子の破れから飛込んで、手桶の中に浮ぶ影が、薄暗い勝手用のランプの光に白く見える。今夜こそ大手柄をして、うち中驚かしてやらうと決心した吾輩は、豫め戰場を見廻つて地形を飲込んでおく必要がある。戰鬪線は勿論餘り廣からう筈がない。疊敷にしたら、四疊敷もあらうか。其の一疊を仕切つて、半分は流し、半分は酒屋や八百屋の御用を聞く土間である。竈は貧乏勝手に似合はぬ立派なもので、赤の銅壺がぴか／＼してゐる。其の後の羽

臺(台)　椽縁　畫(書・画)

目板との間二尺が、吾輩の鮑貝の所在地である。茶の間に近い六尺は、膳・椀・皿・小鉢を入れる戸棚となつて、狹い臺所をいとど狹く仕切つて、横に差出たむき出しの棚とすれ〳〵の高さになつて居る。其の棚の下に擂鉢が仰向に置かれて、擂鉢の中には、小桶の尻が吾輩の方を向いて居る。大根卸・擂粉木が並べて懸けてある傍に、火消壺が置いてある。眞黒になつた椽の交叉した眞中から、一本の自在を下して、先には平たい大きな籠をかけてある。其の籠が時々風に搖れて、大樣に動いて居る。

是から作戰計畫だ。どこで鼠と戰爭するかといへば、無論鼠の出る所でなければならぬ。如何に此方に便宜な地

齋（斎）
齊（斉）
邊（邉・辺）

形だからといつて、一人で待構へて居ては、てんで戰爭にならぬ。こゝに於てか、鼠の出口を研究する必要が生ずる。「どの方面から來るかな。」と、臺所の眞中に立つて四方を見廻す。何だか東鄕大將になつたやうな心地がする。下女はさつき湯に行つて、歸つて來ぬ、子供は疾くに寢た、主人は相變らず書齋に引籠つてゐる、細君は何をして居るか知らない。時々門前を人力が通る。通り過ぎた後は一段と寂しい。我が決心といひ、我が意氣といひ、臺所の光景といひ、四邊の寂寞といひ、全體の感じが悉く悲壯である。どうしても猫中の東鄕大將としか思はれない。かういふ境涯に入ると、物凄い中に一種の愉快を覺えるのは、誰しも同じ事

管
菅

であるが、吾輩は此の愉快の底に、一大心配が横たはつて居るのを發見した。鼠と戰爭をするのは覺悟の前だから、何匹來てもこはくはないが、出て來る方面が明瞭でないのは不都合である。周密に觀察して見ると、鼠族の侵入するには三つの路がある。彼等が若しどぶ鼠であるならば、土管に沿うて、流しから竈の裏手へ廻るに相違ない。其の時は火消壺の蔭に歸路を絶つてやる。或は溝へ湯を拔く漆喰の穴から風呂場へ廻つて、勝手へ不意に飛出すかも知れない。さうしたら、釜の蓋の上に陣取つて、眼の下に來た時、上から飛下りて一攫みにする。それからと、又あたりを見廻すと、戸棚の戸の右の下隅が半月形に食破られて、彼等の出

爪瓜 つめにつめなく、うりにつめあり。

吊弔

断(斷)

入に便なるかの疑がある。鼻をつけて嗅いで見ると、鼠臭い。若しこゝから突貫して出たら、柱を楯に遣り過しておいて、横間から、あつと爪をかける。もし天井から來たらと、上を仰ぐと、眞黑な煤がランプの光で輝いて、地獄を裏返しに吊した如く、ちよつと吾輩の手際では、上る事も下る事も出來ぬ。まさかあんな高い處から落ちて來る事もなからうからと、此の方面だけは警戒を解く事にする。それにしても三方から攻撃される懸念がある。一口なら片眼でも退治して見せる、二口ならどうにかかうにか遣つてのける自信がある、併し三口となると、吾輩も手のつけやうがない。どうしたらよからう、どうしたらよからうと考へて、好い智慧が出ない時は、そんな事は起る氣遣はないと極めるのが、一番安心を得る近道である。又法のつかないものは、起らないと考へたくなるものである。吾輩の場合でも、三面攻撃は必ず起らぬと斷言すべき相當の論據はないのであるが、起らぬとする方が、安心を得るに便利である。安心は萬物に必要である、吾輩も安心を欲する。よつて三面攻撃は起らぬと極める。

それでもまだ心配が取れぬから、どういふものかと段々考へて見ると、漸く分つた。三個の計略のうち、いづれを選んだが最も得策であるかの問題に對して、自ら明瞭なる答を得るに苦しむからの煩悶である。戸棚から出る時には、

峽（峡）　狹（狭）　挾（挟）

吾輩之に應ずる策がある。風呂場から現れる時は、之に對する計がある。又流しから這上る時は、これを迎へる成算もあるが、その中どれか一つに極めねばならぬ事になると、大いに當惑する。東郷大將はバルチック艦隊が、對馬海峡を通るか、津輕海峡へ出るか、或は遠く宗谷海峡を廻るかに就て、大いに心配されたさうだが、今吾輩自身の境遇から想像して見て、御困却の段、實にお察し申す。

吾輩はかく夢中になつて、智謀を運らして居る。夜はまだ淺い、鼠はなか／＼出さうにない。吾輩は大戰の前に一休養を要する。（吾輩は猫である）

猫と鳥

吾輩は近頃運動を始めた。如何なる種類の運動かと不審を抱く者があるかも知れないから、一寸説明しよう。吾輩は不幸にして器械を持つ事が出來ない。だからボールもバットも取扱ふことが出來ない。次には金がないから買ふ譯にゆかない。此の二つの理由からして吾輩の選んだ運動は一文入らず器械なしと名づくべき種類に屬するものと思ふ。

主人の庭は竹垣を以て四角にしきられて居る。縁側と並行して居る一邊は八九間もあらう。左右は雙方とも四間に過ぎぬ。吾輩の始めた垣巡りと云ふ運動は、此の垣の上を落ちない樣に一周するのである。是はやり損ふこともまゝあるが、首尾よく行くとお慰みになる。ことに處々に根を燒い

推參　無禮なること。

た丸太が立つて居るから、一寸休息に便宜がある。今日は出來がよかつたので朝から晝迄に三遍やつて見たが、やる度にうまくなる。うまくなる度に面白くなる。到頭四遍繰返したが、四遍目に半分程巡りかけたら、隣の屋根から烏が三羽飛んで來て、一間許り向うに列を正してとまつた。

是は推參な奴だ、人の運動の妨をする。ことにどこの烏だか籍もない分際で、人の塀へとまるといふ法があるもんか、と思つたから「通るんだ、おい、退き給へ。」と聲をかけた。眞先の烏は此方を見て、にや〳〵笑つてゐる。次のは主人の庭を眺めて居る。三羽目は嘴を垣根の竹で拭いて居る。何か食つて來たに違ひない。吾輩は返答を待つ爲に、彼等に三分間の猶豫を與へて垣の上に立つて居た。烏は通稱を勘左衞門と云ふさうだが、成程勘左衞門だ。吾輩がいくら待つても挨拶もしなければ飛びもしない。吾輩は仕方がないから、そろそろ歩き出した。すると眞先の勘左衞門がちよいと羽を廣げた。やつと吾輩の威光に恐れて逃げるなと思つたら、右向きから左向きに姿勢をかへただけである。

此の奴め、地面の上なら其の分に捨て置くのではないが、如何にせん只さへ骨の折れる道中に、勘左衞門などを相手にして居る餘裕がない。といつて、又立ち留まつて三羽が立退くのを待つのもいやだ。第一さう待つて居ては足がつゞかない。先方は羽根のある身分であるから、こんな處へはとまりつけて居る。從つて氣に入ればいつ迄も逗留するだらう。こつちは是で四遍目だ。只さへ大分勞れて居る。況や綱渡りにも劣らざる藝當兼運動をやるのだ。何等の障害物がなくてさへ落ちんとは保證が出來んのに、こんな黑裝束が三個

まうし子　申し子、神佛に祈りて授かりたる子。

烏合の衆　規律もなく統一もなきよりあつまり。

も前途を遮つては、容易ならざる不都合だ。愈、となれば自ら運動を中止して垣根を下りるより仕方がない。面倒だから、いつそさう仕らうか。敵は大勢の事ではあるし、ここには餘り此の邊には見馴れぬ人體である。嘴が乙に尖つて、何だか天狗のまうし子の樣だ。どうせ質（たち）のいゝ奴でないには極つて居る。退却が安全だらう、餘り深入りをして、萬一落ちでもしたら猶更恥辱だ。と思つて居ると、左向けをした烏が阿呆と云つた。次のも眞似をして阿呆と云つた。最後の奴は御丁寧にも阿呆阿呆と二聲叫んだ。如何に溫厚なる吾輩でも、是は看過出來ない。第一自己の邸內で烏輩に侮辱されたとあつては、吾輩の名前にかゝはる。名前はまだないから、かゝはりやうが無からうと云ふなら、體面に關（かゝは）る。決して退却は出來ない。諺にも烏合の衆と云ふから、三羽だつて存外弱い

かも知れない。進めるだけ進め、と度胸を据ゑて、のそ〳〵歩き出す。烏は知らん顏して、何かお互に話をして居る樣子だ。愈、癪に障る。垣根の幅がもう五六寸もあつたら、ひどい目に合せてやるんだが、殘念な事には、いくら怒つても、のそ〳〵としかあるかれない。漸くの事、先鋒を去ること約五六寸の距離まで來て、もう一息だと思ふと、勘左衞門は申しあはせた樣に、いきなり羽搏きをして、一二尺飛上つた。其の風が突然吾輩の顏を吹いた時、はつと思つたら、つい踏み外して、すとんと落ちた。

これはしくじつたと、垣根の下から見上げると、三羽とも元の處にとまつて、上から嘴を揃へて、吾輩の顏を見おろして居る。圖太い奴だ。睨みつけてやつたが、一向利かない。背を丸くして少々唸つたが、益、駄目だ。俗人に靈妙なる詩の意味

二葉亭四迷 本名長谷川辰之助、小說家、ロシア文學に通ぜり。明治四十二年歿、年四十八。

が分らぬ如く、吾輩が彼等に向つて示す怒の記號も、何等の反應を呈しない。考へて見ると無理のない所だ。吾輩は今まで彼等を猫として取扱つて居た。それが悪い。猫なら此の位やれば慥かに應へるのだが、生憎相手は鳥だ。鳥の勘公とあつて見れば致し方がない。

機を見るに敏なる吾輩は到底駄目と見て取つたから、綺麗さつぱりと縁側へ引上げた。（夏目漱石）

六 犬ころ

二葉亭四迷

嬉しいにつけ、悲しいにつけ、憶ひ出すのはポチの事だ。

春雨のしと／＼降る薄ら寒い夜の事であつた。私は例の通り、宵の口から寢てしまつたが、ふと目をさますと、耳元

拍柏　儘（侭）　聽（聴）

近くに妙な音がする。「こう」といふかとすれば「すう」と、或は高く、或は低く、單調ながら拍子を取つて、さながら大鋸で大丸太を挽割るやうな音だ。私は夜中に滅多に目を覺したことが無いから、初はびつくりしたが、能く研究して見ると、なに父の鼾なので、やつと安心して、其の儘再び眠らうとしたが、どうもこれが耳に附いて寢つかれない。仕方がないから、聞えるまゝに其の音に聽入つてゐると、何時からとなく囃子の手が込んで來て、合の手に、遠くでかすかに「きやん／＼」といふやうな音が聞える。鼾

聲（声）

が凄じい時には、それに氣壓されて聞えぬが、軒が低くなると、判然と手に取るやうに聞える。不思議に思つて益耳を澄ましてゐると、次第に大きく高くなつて、遂には軒と離れ離れに、確かに門前に聞える。

かうなつて見ると、疑もなく小狗の啼聲だ。時々喉でも締められるやうに、けたゝましく「きやん〳〵」と啼立てる。其の聲尻がやがて段々に細く悲しげになつて、めいるやうに遠い〳〵處へ消えて行く。――かとすれば、忽ちまた近くで、堪へきれぬやうに啼出して「くん〳〵」と鼻を鳴らすやうな時もあり、「ぎやお」と欠伸をする時もある。

私はそつと夜着の中から首を出して「小さい狗の聲だねえ。どうしたんだらう。」と、うるさく母にきくと、母はやさしく「何處かの人が棄てた狗であらう。」と、一々說明してくれて「もう晚いから默つてお寢。」と、あちらを向いてしまつた。

私も亦夜着をかぶつた。狗は門前を去つたのか、鳴く聲が稍遠くなるにつれて、父の鼾が又うるさく耳に附く。寢られぬ儘に、私は夜着の中で棄狗の有樣を繰返し〳〵考へた。

まづ何處かの飼犬が、緣の下で兒を生んだとする。ちつぽけなむく〳〵したのが重なり合つて、首を擡げて乳房を探してゐる所へ、親犬が餘所から歸つて來て、其の側へどさりと橫になり、片端から抱へ込んで舐めると、小さいから、舌の先でたわいもなくころ〳〵と轉がされる。轉がされて

默點　探深

温（温）

は大騷して起返り、又よち〳〵と這つて、ぼつちりと黒い鼻面で、お腹を探り廻り、漸く思ふ柔かな乳首を探り當て、あわてて、吸附いて、小さな兩手で揉みたて〳〵吸出すと、甘い温かな乳汁が出て來て、喉へ流れ込み胸を下つて、何ともいへずおいしい。　と、腕の下から、まだ乳首にあり附かぬ兄弟が、鼻面で割込んで來る。　取られまいとして産毛の生えた腕を突張り、大騷をやつてみるが、とう〳〵取られてしまひ、又そこらを尋ねて他の乳首に吸附く。　其のうちにお腹もくちくなり、親の肌で身體も温まつて、とろけさうな好い心持になり、ついうと〳〵となると、含んだ乳首が脱けさうになる。　夢心地にもあわてて又吸附いて、一しきり吸立てるが、

腕　椀

變（変）

ちきに又たわいなくうと〳〵となつて、乳首が遂に口を脱ける。　脱けるも知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで、一向正體がない。　其の時忽ち暗闇から大きな腕がぬつと出て、正體なく寢入つてゐる所をむずと摑み、宙に吊す。驚いて目をぱつちりあけ、いたいけな聲で悲鳴を揚げながら、四足を張つてもがく中に、頭から何かで包まれたやうで眞暗になる。　窮屈で息が塞がりさうだから、出ようとするが出られない。　暫くもがいて居る中に、ふと足搔が自由になると、領元を撮まれて、高い〳〵處からどさりと落された。うろ〳〵してそこらを視まはすけれど、何だか變な淋しい眞暗な處で、誰も居ない。　ぼんやりしてゐると、雨にうたれ

て、見る間に濡れしよぼたれ、おそろしく寒くなる。身慄ひ一つして「くん、くん」と親を呼んで見るが、何處からも出ては來ない。途方にくれて、よち〳〵と這出し、夜中に唯ひとり、温かな親の乳房を慕つて悲しげに啼きまはる聲が、さつき一度門前へ來て、又何處へかさまよつて行つたやうだつたが、それが何時か又戻つて來て、何處をどうもぐり込んだのか、今は啼聲が正しく玄關先に聞える。

私はたまらなくなつて、母に頼んで、此の小狗に食物を與へて、一晩泊めてやることにした。犬嫌の父は、泊めた其の夜を啼きあかされると、うんざりしてしまつて、あくる日は是非逐出すといひ出したから、私は小狗を抱いて逃げまはつて、どうしても放さなかつた。父は困つた顔をしてゐたが、併しこれも一時のことで、其の中に小狗も獨寢に慣れて夜も啼かなくなる。逐出す筈のものに、何時しかポチといふ名まで附いて、姿が見えぬと、父までが一緒に捜すやうになつてしまつた。（二葉亭全集）

はつゆきや犬のかほ出す杉の垣　　其角

追ひのけて犬の場をとる涼み哉　　也有

庭下駄に鼻あげて犬の晝寢かな　　紅緑

七　巴里の五月

島崎藤村

山羊の乳を賣りに來る男が、朝早く此の町を通ります。

與（与）

獨（独）

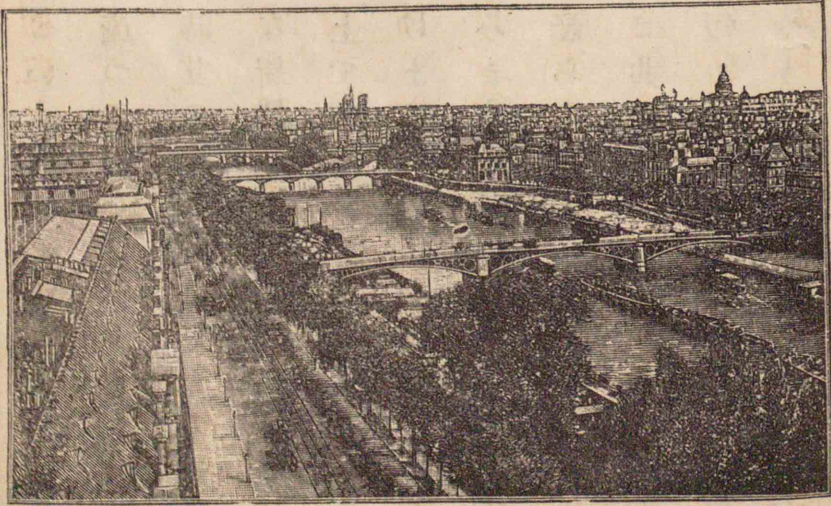
其角　榎本氏。
也有　横井氏。
紅緑　佐藤氏。
島崎藤村　長野縣の人、名は春樹、小説家。

牧　枚
窗・窻（窓）
故郷で　長野縣西筑摩郡。

幾頭かの山羊を引連れながら、面白をかしく笛を吹いて來るので、呼留めて買はうとする者があれば、すぐ其の家の前で、新鮮な乳を搾つてくれるのです。今朝も私は山羊の乳賣の笛に眼を覺ましました。夢の樣に寢床の中で耳を澄ますと、若草を吹く五月の風が、遠い牧場の方から、とぎれとぎれに持つてでも來るやうな笛の音が、まだ朝のうちの玻璃窓へ傳はつて來て、何かかう自分等の心の底に眠つて居るものを、誘ひ出すやうな心地が致します。故郷で飴屋の吹いて來る唐人笛を聞きますと、二度とは自分等の生涯に來ない少年時代の方へ心を誘はれるやうな氣が致しますが、此の山羊の乳賣の笛の調子が、何となくあの唐人笛に似て居ります。今少し澄んだ柔かな音です。巴里のやうな大きな都會の空氣中にも、かうした田舍めいた情を傳へる細い幽かなしらべが流れて居るかと、珍しく思ひました。

舍（舎）
當（当）

只今は當地でも最も樂しい時です。輝いた日光は窓の外にあります。櫻の花があわただしく散つて、若葉に變つて行くやうな趣は、當地には見られ



巴里市街

緣綠
續(続)

ませんが、でも春の過ぎて行くといふ心地が、私の胸に深く浮んでまゐります。日に〳〵茂つて行くプラターヌの並木の若葉が、少し萎れて見える時、其の葉の間に日光の滿ちた時、五月らしい雨が來て、柔かな新綠の生返る時、私は又遠い空の彼方に、曾て信濃の山の上で望んだと同じやうな、白い綿のやうな暮春の雲を見つけます。それが微風に吹かれて、絶えず形を變へるのを望みます。長い黃昏時が又やつて來るやうになりました。恐らく此の黃昏時は暮れさうで暮れない町の空氣の紫色と共に、もつと〳〵長く續くやうになるでせう。そして極短かつた冬の日とちやうど反對に、一晝夜の大部分を晝のやうに明るくしてしまふでせう。

帶(帯)
挿(挿)

地帶から言つて、當地が北海道あたりに近い事は、鈴蘭の花で思ひ當ります。此の花が信濃の山の上でも採集されるのは、やはり北海道あたりと氣候を同じくするからでせう。五月の一日には、當地の町々で鈴蘭の小さな花束にしたのを賣ります。それを幸福の象徴として、胸のあたりに挿して行く男女を見掛けます。

(平和の巴里)

○

實際巴里の市街には澤山の雀がゐて、それが人に馴れて、よく公園なぞでは、パン屑を投げて、自分の周圍に澤山の小鳥が呼びかひ、肩の上、帽子の上まで怖れ氣もなく集まつて來るのを悦んでゐる人を見かけます。そしてその小鳥らはパン屑

の行方を追つて空中で宙返をしたり、芝草の上へ敏捷に飛込んで來たりするのを見かけます。また白鳩がブラターヌの葉の落ちた枝にとまつて、下を通る人をまじ〳〵見てゐるのやすゞかけ鳩が芝草の上をのそ〳〵あるいたりしてゐるのを見かけます。巴里は小鳥の住むにも樂しい、おそれのない國のやうです。」（フランス印象記――吉江孤雁）

八　親ごころ

一　酒勾なる二兒へ　　大町桂月

毎々手紙くれてうれしい。伊澤先生が二十日まで居るがよからうとの御手紙故、そのつもりにて大いに勉強すべし。十五六日頃一寸行くかも知れぬが、二十日には必ず迎へに行く。土産物はその時ゆつくり買ひてよかるべし。

先生よりの御手紙に、決して父の吃音を眞似してはならぬ、といふことをお前達に誓はせることの事ゆゑ、お前達もそのつもりにて、先生の言はるゝ事を承るべし。この父の吃音の眞似させたくなきは言ふまでもなし。その外缺點もあり、惡癖もあり。世上どんな人でも長所と短所とあるものなり。然るに、人は他人の短所には氣がつき易けれど、他人の長所には氣がつきにくきものなり。この父の短所多けれど、男らしいといふ氣象は大

大町桂月　高知縣の人、名は芳衞、文章家。大正十四年歿、年五十七。

酒勾　神奈川縣小田原の東北。

伊澤先生　名は修二、教育家、貴族院議員。晩年東京小石川に樂石社を起し吃音矯正の事に從ふ、大正六年歿、年六十七。

產（産）

衆象

罐・鑵
隨（随）

いにもつて居るなり。これはお前達が年長ずるにつれて分つてくる。文章も決して人後に落ちぬなり。この二點は大いに眞似して可なり。

「餓ゑては食をえらばず」と、古の人が言へり。お前達は肴が嫌ひなるが、餓ゑたら必ず食へる。嫌ひでも食つてをれば終には好きになる。何か罐詰でも送ることはわけもないが、それでは却つてお前達のためにならぬ。長じて兵隊に出たり、旅行したり、人の家に行つたり、その他いろ〳〵の時に困る。人は食物に好き嫌ひがあるが如く、萬事氣隨氣儘になり易し。氣隨氣儘では世は渡れぬ。何事も辛抱が大切なり。この儀よく〳〵心に銘すべし。今日は父も母も忙しくて郵便局へ行けぬ故爲替は明日あたりおくる。

（桂月全集）

五十嵐力　米澤の人、文學博士、早稻田大學教授。
四磨　作者の愛兒、昭和三年一月年二十六にして歿す。

二

米澤なる四磨へ　　五十嵐力

お前が立つてから、家の中はピンカラリン、まるで大風の吹いたあとの樣で、鼠に引かれさうな淋しい日を送つてゐる。あの小坊主（お前の事）を淋しい時だけ取りよせて傍において、やかましくて困る時は、電氣仕掛で國へ送つてやれたらよからうなど云つては、生きた人間が、まさかさうもなるまいなんて、馬鹿話をする事も度々

吸汲

謙信公　上杉謙信。

上杉神社　別格官幣社、米澤舊城の中央にあり。

鷹山公　上杉治憲、出羽國米澤城主。文政五年（約一〇〇年前）歿、年七十七。

ある。

親類まはりや、山登りや、温泉あるきや、水泳や、魚釣りで大分忙しい様子、結構だ、結構だ。好い空氣を吸つて、うんと遊んで、これから一年の間勉强する元氣を養つて來るがよい。但しその間に朝一二時間の數學・英語その他のお稽古、これは是非ともやらねばなりませんぞ。

お墓參りに行つたら、よく御寺の様子を見て、歸つてからお話しなさい。先祖様のお墓、お祖父様・お祖母様の御墓には、取りわけ立派に御辭儀をしていらつしやい。それから謙信公の上杉神社、鷹山公の松岬神社へも是非參詣して、尙お婆様達から謙信公・鷹山公のお話をよく伺つていらつし

巣鴨　東京市外巣鴨町。一六一六は住宅の番地。

やい。それから若し暇があつたら、御廟山に參詣して、上杉家の御廟所の左手の前に、今から百數十年前の御祖父様——鷹山公に御奉公して家の先祖様達の中で一番立身したお方——の献納なさつた石の燈籠が立つて居り、それにその御祖父様の名と献納なさつた年月とが刻んである。それを見て、わが家は米澤藩の中でも卑しい家柄ではなかつた、吾々も先祖様達の御顏をよごしてはならぬといふ事をよく考へていらつしやい。

もう明日は八月だ。もう二週間ばかりでお前に逢へると思ふと、中旬が待遠でならぬ。達者で歸つて來るんだぞ。よいか、病氣をせずに、怪我をせずに、巣鴨の一六一六に歸つ

柳澤淇園　大和國の人。名は里恭、博識家、寶暦八年（約一七〇年前）歿、年五十三。
秀衡　藤原氏。
錦戸太郎　國衡。
元良冠者　高衡。
伊達次郎　泰衡。

て、二の間の蚊屋の中へお母様達と一しよに寢て、そして井戸に冷したサイダーを飲むんだぞ。

あとは明日、左様なら〱。

（わが書簡）

○

世の中に思ひあれども子を戀ふる
思ひにまさる思ひなきかな　　紀貫之

九　子を見るの明　　柳澤淇園

「子を見ること親に若かず。」といへり。奥州の秀衡は男子五人あり。兄の錦戸太郎は常に良き馬を好みて、山野を乘ることをつとめ、元良冠者は女子を友として遊ぶことを專らに好み、伊達次郎は山川の漁獵を好みて、他の事をせず。

泉三郎　忠衡。
繼（継）
金華山　宮城縣牡鹿郡。

泉三郎は武具を好みて、よきものある時は求め來りて自ら試み、刀劍など作物は人にも讓り與へて、よからざるは擲き折りては棄てたりとぞ。いづれも文學の道を習はするに、皆嫌ひて、たゞ他の業のみを事としけれど、泉ばかりは、夜を日に繼ぎて文學の道に凝りつとめたり。

或時秀衡は子供の志を試し見んとて、秋の末つ方、金華山へ皆々を伴ひ、山上に席を設けて、山河の風景を眺望するをりから、子供を集めて申しけるは、「いづれも、遙かなるあなたの山の尾の上にひともとの櫻あり。今を盛と見えて、花の爛漫として咲けること、雪かあらぬか、皆々の目にもさぞかし見ゆらんや。」と申しけるに、おの〱伸上り立上りつゝ

測側

見て「いかにも父の仰の如く、櫻花今を盛と見えて、しかも麗しく見え候なり。」といふに、泉ばかりは暫く眺めつれども、櫻花の見えざりければ、父の側に到りて「仰に隨ひ見參らせ候へども、我が眼には花らしきもの少しも見え申さず。」とて、打連れて歸りぬ。

秀衡心に思ふやう、花無きを有りといひしは、彼等が志を見んとてのてだてなるに、四人はみな實無き花を、我に諂ひて有りといへども、泉ばかりは、無き故にこそ無しとはいひけめ。勇は錦戸すぐれたれども、諂ふ心あり、元良は柔弱なり、伊達は義あるに似て勇なく、泉は勇少しといへども義ありと。

薄田泣菫（すゝきだ）　名は淳介、岡山縣の人、文學者、大阪每日新聞記者。

ロイド、ジョージ　西暦千九百二十二年十月首相辭職。

その後、九郎義經奧州に下りて、秀衡をたよりてゐける頃、鎌倉より討手下向の時、秀衡、泉ばかりに遺言して、深く義經の先途をたのみ置きけり。果して錦戸はじめ兄弟達みな義經に反きけるに、泉はひとり義に死して、芳しき名を後世にとゞめたりとぞ語り傳へたる。（雲萍雜志）

一〇　人間の大小

薄田泣菫

薄田泣菫

世界大戰で、聯合軍側の大立物は、何といつても英國首相ロイド、ジョージ氏を第一に推さねばならない。其の大立物の

ウエールス　英國の州の名。

詰結

ロイド、ジョージ氏が、ウェールス生れの、身長の低い、やつと五尺そこ〳〵の小男だとは知らない人が多い。

戰爭中の或年の春だつた。ロイド、ジョージ氏が南ウェールスの或都市へ演說に出かけたことがあつた。無論戰爭に關する演說で、自惚好きな英國人が、首相の口から直接ドイツ文明が安物のぼろつきれであることを聽くための催しだつた。

其の演說會の司會者といふのは、大のロイド、ジョージ崇拜者で、此の政治家の試みた演說は、どんな詰らないものでも、悉く新聞を切拔いて、手文庫に仕舞つておくといふ風の男だつた。だが、これまで一度も、此の自分の崇拜する人に

ロイドジョージ

出會つたことが無かつたので、其の日は朝から胸をわくわくさせて待つてゐた。會場には聽衆がぎつしり詰つてゐた。當日の演說家を案内して會場へ入つて來た身長の高い司會者は、まづ起つて、此の名高い政治家を聽衆に紹介したが、其の中に次のやうな言葉があつた。

「私は不斷から此の偉人を崇拜してゐましたが、正直に申しますと、體のもつと大きい、見かけの堂々たるお方だとばかり思つてゐましたのに、今日初めてお目にかゝつて、實は驚いたやうな始末で。」

堪湛

次いで起つたロイド、ジョージ氏は、小さいが、しかし胡桃（くるみ）のやうなかつちりした體を演壇に運んだ。

「唯今承りますと、今日の司會者は、私にお會ひになつて、ひどく失望されたやうな御樣子で、まことにお氣の毒に堪へません。」

と、首相は背高（のつぽ）な司會者の方へ皮肉な眼付を投げた。

「だが、今承つて始めて氣付いたのは、私どもの北ウェールスと當地とでは、人間を測る標準が違つてゐるといふことです。南ウェールスでは、人間を頭から下の大きさで測るらしいが、私どもの北ウェールスでは、其の反對に、頭から上の大きさで大小を定めることになつてゐます。」

若山牧水　宮崎縣の人、名は繁、歌人、昭和三年歿、年四十四。

傳教大師　名は最澄、天台宗延暦寺の開祖、弘仁十三年（約一一〇〇年前）寂。

當山　比叡山延暦寺。

かういつて、ロイド、ジョージ氏は自慢の大きな頭を肩の上で振つて見せた。聽衆は譯もなく嬉しがつて、頭から下の馬鹿に大きい體を搖ぶつて喝采した。（新茶話）

○

山高きが故に貴からず、樹あるを以て貴しとなす。

人肥えたるが故に貴からず、智あるを以て貴しとなす。（實語敎）

一一　叡山の鳥

若山牧水

一

多いのはたゞ鳥の聲である。大正十年が當山開祖傳敎大師の一千一百年忌に當るといふ舊い山、そして五里四方にわたるといはれる廣い森林、その到る處が殆ど鳥の聲

頂項頂

で滿ちてゐる。
　朝最も早く啼くのが郭公である。「くわッくわう、くわッくわう」と啼く。鋭くして澄み、而もその間に何ともいひ難い寂を持つたこの聲が、山や溪の冷い肌を刺す樣にして響き渡るのは、大抵午前四時前後である。この鳥の啼く時、山は全く鳴りを沈めてゐる。「くわッ」と鋭く高く、さうして直ちに「くわう」と引くその聲が、ほゞ二つか三つ、或場所で續けざまに起つたかと思ふと、もうその次は、他の山の頂か、溪の深みに移つてゐる。　暫くも同じ處に留つてゐない。　そして殆どその

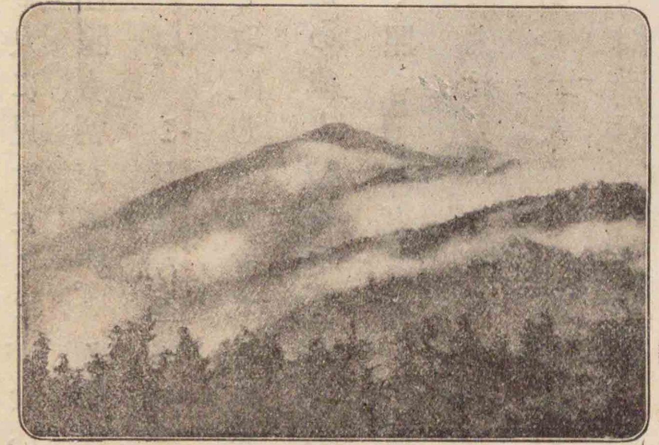
亂(乱)

姿を人に見せたことがない。
　杜鵑も朝が多い。　これはきつと最も高い梢でなくては啼かぬ。　この鳥も二聲か三聲しか聲を續けぬが、どうかすると、取亂して啼立てる事がある。　その時は、例の「本尊かけたか」の律も破れて、全く急迫した亂調となつて來る。　日のよく照る朝などは、聽いてゐて息苦しくなるのを感ずる。
この鳥は聲よりも、峰から峰、梢から梢に飛渡る時の姿が誠に好い。　それから高調子の聲に混つて、何といふ鳥だか、大きさは燕ほどで、その尾の一尺位長いのがゐて、細々と、實に細々と、息を切らずに啼いてゐるのがある。　これは下枝から下枝を渡つて歩いて、時には四五羽、その愛らしい尾を連

煙・烟　寄（寄）

ねてゐるのを見る。

日が闌けて、木深い溪が日の光に煙つたやうに見える時、何處から起つて來るのだか、大きな筒から限もなく拔け出して來るやうな聲で啼立てる鳥がゐる。初もなく終もない。聽いて居れば、次第に魂を吸取られて行くやうに、寄邊のない聲の鳥である。



鶯の比叡をうしろに高音かな　蕪村

比叡山遠望

稍稍

或時は極めて間遠に、或時は釣瓶打に烈しく啼く。この鳥も容易に姿を見せぬ。聲に引かれて、どうかして一目見たいものと、幾度も私は木の雫にぬれながら林深く分入つたが、終に見る事が出來なかつた。筒鳥といふのがこれである。筒鳥の聲は極めて圖拔けた間のぬけたものであるが、それを稍、小さく、且人間くさくしたものに呼子鳥といふのが居る。初め筒鳥の子鳥が啼いて居るのかと思つたが、よく聽けば全く異つてゐる。山鳩にも似、また梟にも近いが、その何れとも違つた、やはり呼子鳥としての言ひ難い寂を帶びた聲である。

數へれば際限がない。晴れた朝など、これらの鳥が殆ど

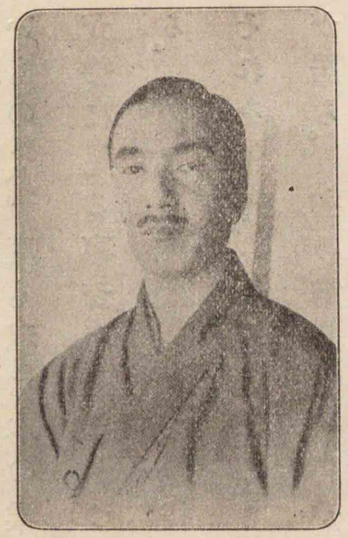
高濱虛子 愛媛縣の人、名は清、俳人文學者。
部屋 比叡山東塔の宿院。
楊 揚

一齊にそこ〵の溪から峰にかけて啼立てる。茫然と佇んで耳を澄ます私は、私のからだ全體の痛み出すやうな感覺に襲はれる事が再々あつた。（比叡と熊野）

二

高濱虛子

寢床を出て楊枝を使ひながら湖水の見える部屋にいつて見る。朝日が部屋一杯にはいつて居る。



高濱虛子

湖水と思はれる邊は雲ばかりで何も見えぬ。富士の頂上から雲海を見下したのと似た景色だ。部屋の下は東谷になつて居るので、我が眼よりや〵高く、や〵低く、數知れぬ杉の梢が鉾のやうに突立つて居る。左手には北谷の向うに當る杜が、鋸の齒のやうな杉を背に並べて湖の方に流れて居る。空氣がいやが上に淸いので、近景の杉の梢も遠景の杉の杜も新鮮な色をして居る。さうしてその間を薄い霞が流れて居る。非常に靜かだ。自分の呼吸の外、うき世の物音は何も聞えぬ。

たゞこの天地を我が物顏に啼きさへづつて居るのは小鳥だ。何といふかはい〵聲の小鳥があるものであらう。名が分らぬのが殘念だ。その杉の梢で一羽啼いて居る。彼方の杉の梢で他の一羽が答へて居る。又遙か向うの谷深く他の一羽が應じて居る。よく耳をすますと、なほ二三

杜 杜
殘（残）

凜（凜）　縱（縱）

羽の聲がどこかで聞えるやうだ。

この小鳥の合奏を破るやうに、別な聲の小鳥が突然その間に高音を張る。前の小鳥ほど優しい聲ではないが、また凜々しい所があつて、その聲の空山に響く趣が何ともいへ

大空に又わき出でし小鳥哉　虚子

ぬ。これも名は分らぬ。それが一羽ではない、三羽四羽と段々聲の主が殖えて來る。前の小鳥が縱糸なら、この小鳥は横糸だ。互に錯綜してよく諧調を保つ所が面白い。

侵浸

突然けん〳〵とけたゝましい音が谷を横ぎる。此方の谷にも響けば、彼方の峰にも響く。昨日聞いた雉子の聲よりもやゝ急調だ。山鳥ででもあらうか。前の二つの小鳥で織りなした美しい絹を、たゞ一聲に引裂いたかと疑はれる。暫くして、その聲は谷の底、峰の奥の奥に浸みこんでしまつて、あとはもとのとほり靜かになる。

眞先にその靜けさを破るものは鶯の聲だ。絹に置かれる絣のやうに美しい。一つの絣が置かれると、また縱糸を織つて前の小鳥が啼く。また横糸を織つて次の小鳥が啼く。絣が鳴く。縱糸が鳴く。横糸が鳴く。この絹をまた山鳥が破るのかと思ひながら待設けて居ると、不思議な聲

が別に起る。それは麓の里の池で聞く蛙の聲によく似て居て、谷の神社の鰐口が口をあけて、つぶやくのかとも思はれる。他の鳥の聲々が皆高調で晴々とした中に、獨り低調で不平らしい音を出すのが面白い。友は啄木鳥だらうといつた。二人の和尚は山鳩だらうといつた。

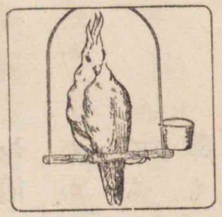
湖水の上にはまだ漠々とした白雲が漂つて居る。杉の梢を渡れる霧は少しづつ薄らいで來て、だん／＼と谷が深く見えて來る。（新寫生文）

○

葉がくりに蟲をもとめて鳴く小鳥
ほつえに向きて鳴きうつる見ゆ

中村憲吉

河井醉茗　大阪府堺市の人、名は又平、詩人。



一二　鸚鵡

河井醉茗

はる／＼と
海を越えて來た鸚鵡よ
萌葱色の翼をさめて
お前は何を考へてゐる
こゝろもち首をかしげて
しづかに
お前は何を聞かうとしてゐる
鸚鵡や鸚鵡や
よく來たね
遠い海を越えてよく來たね
心配することはない
わたし達は

お前を大事に大事にして
まもつてやる
私たちの言葉が
お前にわからないのか
何をそんなに不思議さうな顔をして
考へてゐる
世界がちがふのか
こゝもお前の世界だよ
お前がどんなに考へても
わからない世界だよ
でも安心しておいで
誰もお前にわるくはしないから――
いつまでも考へてゐるより
早くおもしろい言葉を覺えてごらん

闘（鬪）

蹟績積

一三　英雄名はリゾー

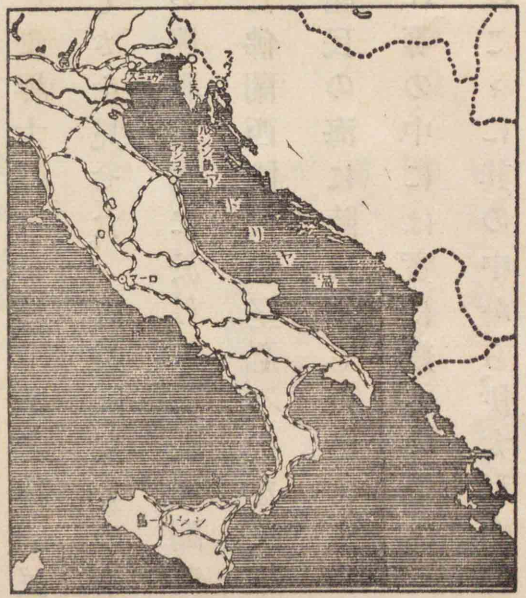
世界大戦争に於て、歐米諸國民は各、その愛國心の尊さ美しさを見せた。商業國民とのみ思はれてゐた白耳義國民の開戰當初に於ける勇戰健闘、美術國民とのみ思はれてゐた佛蘭西國民の堅忍不拔な英雄魂、さては敵ながらも獨逸國民の海に陸に示した燃えるやうな愛國心と智謀膽略、これ等の中には實に幾多の傳ふべき愛國的美談がある。余はこゝに其の中から、伊太利國民性の豪膽・沈着・果斷に加ふるに、火のやうな熱情を表はせる、一英雄の壯快な事蹟を語らうと思ふ。

アドリアチック　イタリー・ユーゴスラブ・モンテネグロ・アルバニアに圍まれた海。

態

一九一七年　大正六年。

英雄名はリゾーといふ。大戰爭の始まるまではアドリアチック海を航行する伊太利汽船の一高等運轉士であつた。開戰後間もなく志願して軍艦に乘組んだ。事に當つて彼の示した沈着な態度と正鵠を逸しない決斷とは、やがて艦内に彼の在ることを知らしむるに至つた。



彼の第一の偉勳は一九一七年の十二月の一夜、敵身方の想像を裏切つて樹てられたのである。當時獨逸は西部戰

トリエスト　アドリアチック海の奥に在る軍港、今イタリーに屬す。

潛（潛）

效（効）

線で非常な優勢を示し、中歐同盟の瓦解などはまだ氣色にも見えぬ時であつた。墺太利は、ともすれば陸上に伊太利を壓倒せんとするばかりか、海上にはトリエスト軍港を根據地として脅威を加へてゐた。此のトリエスト軍港は實に墺太利の力瘤で、守備の嚴なるは近代軍港防備術の基本とも稱すべきであつた。其の要害の中へ、彼は夜陰に乘じて一隻の水雷艇に搭じて潛入し、港内に碇泊してゐた二隻の弩級戰艦を攻擊して、一隻を擊沈し、一隻を戰鬪力なきものにしてしまつて、悠々として引揚げた。此の一擧が敵の心膽を寒からしめ、身方の士氣を鼓舞した、その效果の偉大であつたことは固より言ふ迄もない。

一九一八年　大正七年。

ヴェニス　海を隔ててトリエスト軍港の西にあり。

奇（竒）

明けて一九一八年五月、伊國憲法發布記念日に當り、水都ヴェニスで、特に彼及び彼の部下の爲に盛大な軍功表彰式が擧行された。此の大名譽の晴の日に、彼は平然として得意の色を表はさなかつたのは、觀衆に奇異の感を起させたといふ。此の表彰日から七日目に當つて、彼は再び世界海戰史上千古未曾有の奇蹟的行動を企てて、首尾よくこれに成功したのである。

アドリアチック海に面したアンコナといふ伊太利の一港から、夜目を忍ぶやうにして二隻の自動艇が出て行つた。二艇とも舷側に魚形水雷を縛り付け、沈下水雷を搭載し、極めて小さな速射砲を一門備へてゐた。リゾー中佐は二艇の指揮官兼艇長として一隻に乘り、他の一隻はアオンゾ少尉が艇長であつた。二人は艇長であると共に、舵手として舵綱を握つてゐた。二艇とも乘員は彼等の外に僅かに六人の屈竟な兵（つはもの）であつた。

フユーメ　ユーゴスラブの北部に在る一港。イタリーの詩人ダンヌンチオが大戰に際して占領したることに由つて名高し。

ルシン島　フユーメの灣頭にある小島。

艫（舮）

二隻の小艇は發動機の音を極度に靜めて、岸傳ひに北へ北へとフユーメの方面へと進んで行く。中佐は軍籍に入る前に、長い歳月の間、此の邊を航行して、星屑の如きアドリアチック海の島々と、其の間を流るゝ潮流の緩急とを、手に取る如く知つてゐた。やがて敵地近くルシンの島陰へ來ると、二艇は舳艫遠く隔てて、はたと止まつた。月なく星明りの夜である。死せるが如く靜かに、夜もすがら敵の海面

發（発）　雙隻　驅（駆）

を監視してゐたが「何の異狀もない。

夜は白み初めた。敵に發見されぬ内に「アンコナ指して引揚げようと準備を始めた時「凪渡つた水平線の彼方に「線香のそれの如き細い二筋の煙が見えて來た。やがて三筋となり「四筋となり「リゾー中佐の雙眼鏡には明瞭に敵の艦體が映り出した。而も其の數も水の底から涌出るやうに次第に增した。紛ふ方なき墺太利の大艦隊である。見れば二萬噸級の超弩級戰艦二隻が舳艫相銜んで左右兩側に四隻づつ前後に一隻づつ驅逐艦を配置し「都合十隻の驅逐艦に護衞されて南方に向つて進航してゐる。先頭に立てる戰艦は墺海軍の重鎭「サンテ・ステフアノ」である。此の艦隊の出動を身方に逸早く報告するばかりでも「二隻の發動機艇に取つては殊勳であるのに「彼リゾー中佐はそれには滿足しようとしなかつた。英雄の血が彼の血管の中に流れてゐた。「危險を意とせず「最も大なる最も强きものに。」と決心した。數町を距てた僚艇へ最も簡單に「見たか。」と信號した。僚艇からも唯「わかつた。」と返答の信號を送つた。若けれどアオンゾ少尉も傑物である。此の間一髮の場合に、ぴたりと二人の呼吸が合つてゐる。

二粒の籾殼のやうな自動艇は「沖の艦隊目がけて敢然として進航し始めた。曉の常として「空が白むに連れて「却つ

血皿

歸(帰)　舷絃弦

て一時海面は暗くなつた。これは二艇に取つて天佑であつたが、よし敵艦隊が見つけた處で、たか〴〵夜獵歸りの漁船位に思つたであらう。二艇も敵にさう思はせるつもりで、敵艦隊に近づくに隨つて速力を緩めた。驅逐艦上に水兵の動くのが見えるまで接近しても咎めない。リゾー中佐の艇は左翼の第一・第二驅逐艦の間を潜り拔けて先頭の戰艦を目がけ、アオンゾ少尉の艇は、右翼の第三・第四驅逐艦の間を拔けて後續戰艦を目ざして突進する。雙方敵艦を距る各、百米突の近くまで接近して、豫て用意の魚形水雷を發射した。中てまいとしても中るほどの近距離である。アオンゾ少尉の放つた魚雷は、後續艦の艦尾に近い舷側に

狂柱往

轟然たる爆音を揚げて水柱を立てた。小山のやうな艦體は、一時に崩るゝが如く右舷に傾斜した。危急信號は發せられて、周圍の護衛艦は火事場に集まる消防車の如くかけ集まる。續いてリゾー中佐の放つた魚雷は、見事に先頭艦の胴中を貫いて機關部を爆發させたと思しく、艦體は巨鯨の狂ふが如く、艦首を空に向けて波間に沈んで行く。集まつた驅逐艦は、此の慘禍の原因をすら知るに困つて、たゞ右往左往に狼狽するばかりである。

此の機に乘じて、アオンゾ少尉の艇は急速力で逃出した。後を追うてリゾー中佐の艇は、波間を裂くやうに疾走した。物の十五分ともたゝず、敵の二驅逐艦は白浪を蹴立て全速

鈞鈞鈞

力を出して、大鷲が雀を追ふやうに追ひすがる。後なる中佐の艇は最早絶體絶命と見えた時、中佐は運轉士に「速力をゆるめよ」と命じた。餘りに意外な命令である。運轉士は艇長の氣が狂うたのではないかと思つて、「大丈夫ですか。」と問ひかへした。「命令だ。」一語は千鈞よりも重い。

小艇の進行の鈍つたと見るや、敵艦は愈、勢こんで追ひ迫つて來る。艇と艦との距離が僅々十數間に迫つた時、中佐は艇の底から沈下布設水雷を摑み上げて、眞一文字に進んで來る敵艦の進路に、波の下へ落し込んで「全速力。」と命令した。艇が全速力に復つた次ぎの瞬間に、追擊してゐた先頭の敵驅逐艦は、物の見事に爆音と共に艦影を沒した。此の不意の出來事に心を奪はれたか、後續の驅逐艦は追及を止めて被害艦員の救護に從事した。

此の間に二艇は遠く逃延びて、夜の全く明け放れた頃には、乘組一人の負傷者さへなく、根據地に引揚げて來た。

此の報が電流の如くアンコナ市民の耳に傳はると、市民は狂人のやうに勇士等を迎へ、感激の涙を浮べて、その功績をたゝへた。しかし、中佐の口からは此の事に就いて何も語られなかつた。群る人々に「たゞ義務を盡しただけです。」と謙遜な一語を殘して、彼は傍目もふらず郵便局に急いで、シシリー島に明け暮れ彼の安否を氣遣つてゐる老母へ「嬉しくてたまりません。」と打電した。（東京朝日新聞）

奪奮

シシリー島　イタリーの南、地中海に横たはる大島。

嘉納治五郎　大阪府の人、前東京高等師範學校長、柔道家。

膽（胆）

ネルソン　英國の有名なる水師提督、トラファルガル海戰にて陣歿、（約一二〇年前）、年四十八。

一四　膽力

嘉納治五郎

膽力は、天稟にもよるが、また決して修養し難いものでもない。上杉謙信が、十四五歳の時、大敵に追はれて門番所の板敷の下に潛伏しながら安眠して居つたとか、德川光圀が、六歲の時、暗夜に刑場に往つて死人の首を持歸つたとか、ネルソンが、幼時から恐怖の何ものたるを知らなかつたとかいふが如きは、皆天稟と見られるのであるが、修養によつて剛膽の人となつた例も、亦決して少

飜・翻

くはない。

昔、武田信玄の部下に、岩間大藏左衞門といふ武士があつた。その容貌は魁偉で、一見した所、儼然たる大丈夫であつたが、その性質は至つて怯懦であつた。信玄が、これを實戰に試してみたところ、七たび進んで七たび退いた。信玄は、これではならぬと思つて、或る日、戰の始まつた時、彼を掩護物のない處に縛りつけ、敵に向つて坐らせて置いた。矢玉は雨のやうに飛んで來る、銃聲は雷の如くに轟く。彼は怖れ戰いて、殆ど死人のやうになつてしまつた。併し幸にも矢玉一つ中らなかつた。そこで彼は飜然として悟り、運が好ければ雨下する矢玉でも中らない、死は決して怖るべき

經（経）　濤（涛）　險（険）

ものではないと知り、一變して武勇の士となつたといふことである。

大藏左衞門が戰を怖れたのは、その危險を過大視したからである。凡そ危險災害の身に迫つた時、直ちにその結果を過大に豫想して、恐怖狼狽することは、神經質の人ほどあり勝である。併し平素修養あり經驗ある者は、決して恐怖狼狽しない。消防夫が、炎々と燃上る猛火の中に、泰然として立つのも、水夫が澎湃として荒れ狂ふ怒濤の間に、自若として働くのも、皆鍛錬と經驗とによつて得た確乎たる自信と牢乎たる覺悟とがあるからである。

又、諦めるといふことも必要である。危險災害などの來る場合に、なるべく安全にこれを避けようとするのは、自然の人情に相違ないが、それがために、却つて怯懦に陷ることがあるものである。かゝる場合に於て、その最も惡い結果を身に引受けても是非に及ばぬといふ覺悟を極めると、膽は自然に据わるものである。強ひて危害を避けようとすると、煩悶・疑懼・周章・狼狽して、自械自縛するので、十分の技倆も六七分より働かず、却つて不結果に陷るのである。

落膽喪神は、ある場合には、その危險の結果を豫想した後ではなく、直ちにその危險の起つた瞬間に來ることがある。これは動物の本能の一つで、殆ど制止し難い勢を以て發動するものであるが、鍛錬の功を積んで、膽力を養成し、終には

喪（丧）

勝海舟　名は安芳、海舟は其號なり、舊幕の傑士。後海軍卿を經て樞密顧問官となる、明治三十二年七十七歲、年七十七

天地の覆るが如き大急變にも、泰然自若として、我を失はないやうな剛膽の人となることを望むのである。（青年修養訓）

男は膽から、膾は酢から。

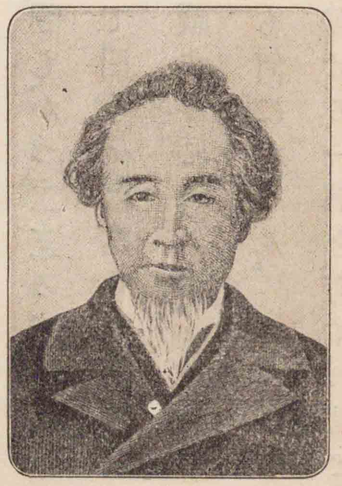
智者は惑はず、勇者は懼れず。「

膽は大ならんことを欲し、心は小ならんことを欲す。」

一五　海舟の苦學

勝海舟、若き頃西洋式の兵術を學びしが、舶載の兵書極めて少く、常に良き書の得がたきを歎ぜり。偶、市中の書肆を過ぎて、新刊の一書を見、これを購はんと思ひて、その價を問へば、五十兩と答ふ。當時書生の身分なれば、五十兩の金は

巳（シ）み
己（キ）おのれ、つちのと
已（イ）すでに、やむ、のみ
みは上に、おのれつちのと下につき、すでにやむのみ中程につく。



勝海舟

直ちに得らるべくもあらず。十數日を經て辛うじてこれを調へ、勇んで書肆にゆけば、かの書は既に賣れてなし。海舟遺憾に堪へず、買ひたる人を問へば、四谷に住める與力某なり。即ち歩を轉じてこれを訪ひ、切に情を陳べて、兵書のゆづりわたしを請ふ。某聽かず。已むを得ず、借覽を請へども、なほ聽かず。乃ち曰く、「書間は足下に要あらん。夜間寢ねたる後は、貸さるとも不可なかるべし」と。某その執拗に驚き、答へて曰く、「夜更けて後は貸すことも可なり。」然れども戸外に持ち去ることを許さ

廢（廃）癈（瘢）

寫（写）

ず」と。海舟その翌夜より通勤を始む。

當時海舟は本所に住み、某の家は四谷に在り。相距ること殆ど一里半。されど雨風烈しき時も、曾て往復を廢せず。又一夜もその時刻を差へず。かくの如くすること半年餘にして、遂に八卷の兵書を手寫するを得たり。乃ち更に主人に面會し、全部を寫し了へたることを告げて、その厚意を謝し、かつ二三の不審の點を擧げてこれを質す。主人驚いて曰く、「僕は寫すべき勞もなきに、足下の如く未だ全部を通讀するに至らず。實に慚愧に堪へず。野人、寶をもてりとも何にかせん。請ふこの書を足下に呈せん」と。海舟、既に寫せる一部を有すればとて、再三固辭したれども、主人聽かず。遂にこれを受けぬ。（海舟言行錄）

上野　東京市、上野驛。

土浦　茨城縣新治郡、霞浦にのぞむ都邑。

一六　水鄕めぐり

高濱虚子

この間、父さんは霞が浦から鹿島・香取へかけて旅行をした。そのお話をして聞かさうか。

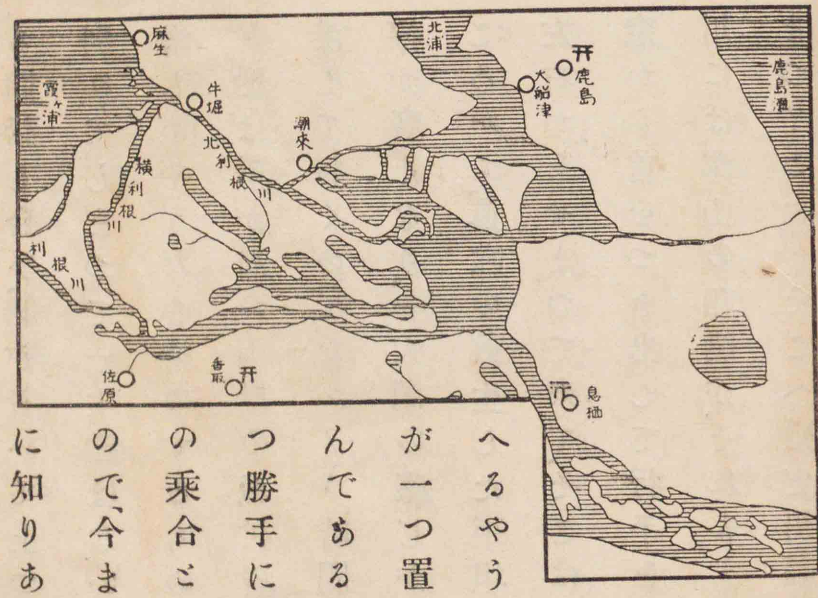
上野を出る時がおそかつたから、土浦に着いた時分はもう燈火がついてゐた。櫻井といふ宿屋に泊つた。土浦といふところは、九萬石の城下であつたさうなが、夜見たところでは淋しいところであつた。それでも電燈はついてゐた。父さんが宿屋の二階の廊下に立つてゐると、父さんの大きな影法師が、その前の廣い庭に刈込んである一つの大

兩國橋　東京市日本橋區と本所區との間、隅田川上に架する橋

きな樹に幽靈のやうにぼんやり映つてゐた。と思ふと、もう一つ影法師がゆら〳〵とその樹に映つて、父さんのと重なつたり離れたりしてゐた。これは下の廊下にゐる人の影法師であつた。それから、廊下の曲り角についてゐる電燈の周りには、小さい蟲が澤山飛んでゐたが、丁度その電燈の腕の出てゐる柱の近くの壁に、一つの黑い蛾が、ペタリとくつついたやうにとまつてゐて、他の澤山の蟲が埃のやうにきら〳〵してゐる中に、目だつて氣味わるくそれが靜まりかへつてゐた。父さんはよく旅をするが、それでも旅といふものは何となく淋しいものだ。

あくる日、こゝから船に乘つたが、船といふのは、兩國橋あたりに行つて見ると、お前らも見るやうな外車（そとぐるま）の川蒸氣だ。

坐座



川蒸氣は、立つと頭がつかへるやうな低い天井の下に、鐵の火鉢が一つ置いてあつて、室の隅つこに積んである座布團を、めい〳〵が一つづつ勝手にとつて敷いて坐るのだ。船の乘合といふものは、一體に面白いもので、今まで何も知らなかつた人が、急に知りあひになつて、一緒に乘つてゐ

霞が浦　茨城縣の東南隅に近く、周回三十四里、琵琶湖に次ぐ湖水。利根川に會して鹿島灘に入る。

麻生　茨城縣行方郡霞が浦の一要港。

る間話し合ひ、船が着いて上つてしまふと、もうそれつきり別れてしまつて一生逢はないのだから、なつかしいやうな淋しいやうな心持のするものだ。

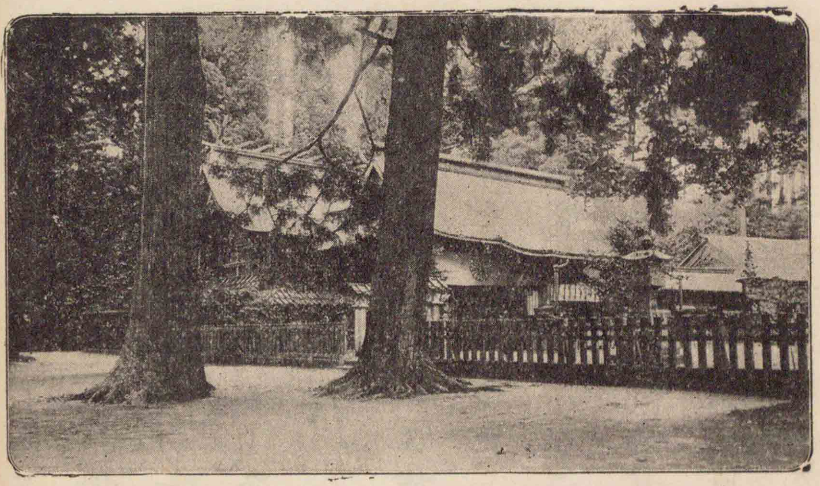
船は霞が浦の兩岸の漁村の主な處にかはりばんこに寄港して行くので、なか〳〵時間がとれる。浦はだん〳〵水幅が廣くなり、一大湖の感じがしてゐたのが、麻生を過ぎたころから、眞菰の叢生した平坦な洲と、やゝ小高い陸地とが左右からせまつて來て、そこはもう小さい川をなしてゐた。窓から首をつき出して行手を眺めると、その掘割のやうな川には、澤山の和船が、それ〴〵荷物を積んでぎし〳〵とつまつてゐた。そこへ殆ど川幅一杯ぐらゐと思はれる川蒸氣が進んで行くのであるから、どうなることかと思つてゐたら、行手の和船どもは、船頭が肩にあてた竹棹を弓のやうにしわらして、何れも力一杯に陸の方に片よせたので、蒸氣は速力をゆるめながら、そのあけてくれた水道の方に舵を轉じて進んで行つた。

牛堀　茨城縣行方郡。霞が浦の咽喉を扼する要津。

潮來　茨城縣行方郡。北利根川に瀕む。

そのうち牛堀といふ處を過ぎて潮來といふ處に着いた。父さんはそこに泊つた。潮來は、昔は有名な處であつたが、今は百姓ばかりのゐるつまらぬ處となつてしまつた。ただ面白いのは、伊太利のヴェニスの都を引合に出すのは仰山かも知れぬが、兎に角水郷といつたやうな感じのする處で、丁度父さんの着いたのは六時過ぎの日暮であつたが、田

氣(気)



香取神宮

から歸る百姓は皆舟に乘つて、男や女が自由自在に櫓を漕いで、こちらの川や向うの川を三々五々と通るのであつた。さつき川蒸氣で通つたところは、この邊で一番廣い水であつたのだが、なほその他に澤山の川があつて、縱横に田の間を流れてゐる。その川が往來の代りになつて、舟が車の代りになる點が、ヴエニスに似てゐると云

鹿島神宮　茨城縣鹿島郡鹿島町に鎭座　官幣大社。
息栖神社　同郡中島村息栖に鎭座。
香取神宮　千葉縣香取郡佐原町に鎭座　官幣大社。

へば云へるのである。けれども土地の人の話によると、昔はもつと水が縱横に流れてゐたのを、だん〳〵埋めて田地にした爲に、今は殺風景なものになつたとの事である。

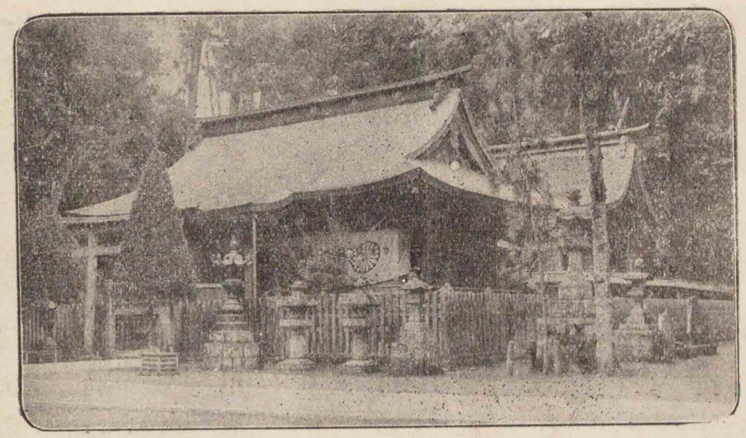
翌朝又こゝから川蒸氣に乘つて鹿島明神に參詣した。それは一時間ばかりで大船津といふ處に着いて、そこから俥で半道ばかりを行つて明神の社に着いたのであつた。

鹿島香取・息栖は、これを三社と稱へて、我國でも最も古い神樣として有名である。お前等は歷史で神武天皇の御東征の事を習つたらう。それよりづツと昔の天照大神の時分に、武甕槌命と經津主命といふ神樣を高天原からお下しになつて、出雲の方からかけて東國までを征服せしめられ

功切

芭蕉 松尾芭蕉。徳川時代中期の俳人。

た。今でいへば東郷大將に乃木將軍といふやうなのが、この神様たちであつたのだ。で、鹿島には武甕槌命、香取には經津主命が祀つてあり、息栖にはこのお二人と負けず劣らずに戰功のあつた神様たちが祀つてある。昔からこの鹿島に參詣したのでは、大分有名な文章もあるが、中でも芭蕉の鹿島詣などは有名である。



鹿島神宮

鹿島神宮は小高い丘の上の鬱蒼たる森の中にあつて、社殿も莊

藤田東湖 名は彪、水戸藩士、幕末の志士にして學者。安政二年歿。年五十。

嚴な建物が古びてゐて神々しい感じに打たれる。お前等は藤田東湖といふ有名な維新前の人を知つてゐるだらう。その東湖先生がこの御社に參つて作つた有名な詩があるが、その中にかういふ意味のことが云つてある。「世の中がどんなに變つても、この神様の御氣象はちやんといつまでも傳はつてゐる。そのため我國が時々衰へようとするやうな時代があると、御氣象を受けた英雄が現れて來て、すぐそれを取りかへす。」と。實際この神様の御前に額づくと、そんなやうな心持がする。東郷大將や乃木大將はやはりその御氣象を受けた人々といへるであらう。

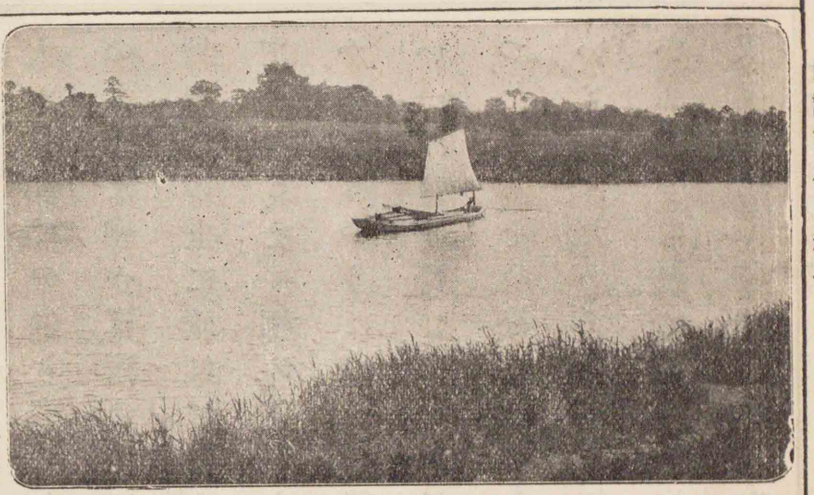
父さんはそれから又もとの大船津に出て、再び川蒸氣に

横利根川　霞が浦と利根川との間の水路。
大利根　利根川の本流。
佐原　千葉縣香取郡佐原町。

乘つて霞が浦に浮かんだのである。　川蒸氣は前の航路を逆もどりして、昨夜泊つた潮來の前をも素通りして、牛堀から左に曲り、横利根川を通つて、大利根に出で、そこの佐原といふ町に船がかりして、その夜は船も佐原に泊り、父さんも山本といふ宿に泊つたのであつた。

この時の船の中で、頭の中にしつかりと殘つてゐる事は、もう船が横利根川に這入つた時分は全く暮れてしまつて、父さんは船窓の硝子に鼻をすりつけるやうにして、外の景色を眺めてゐたのであつたが、その時ボウと赤い光が一つ行手に見えたと思ふと、段々それが近づいて來て、大きな和船がすうと傍を通りすぎた。　その時であつた。　最前からちら〳〵と螢の飛ぶのが目についてゐたのであつたが、今大きな和船の通り過ぎた向うの岸を見ると、そこには一本の大きな柳が眞菰の中に突き出てゐて、絲のやうな澤山の枝を水の上に垂れてゐる、その下の方が妙に明るいと思つて見ると、その柳の下から眞菰の中にかけて、螢籠を置いたかと思ふやうに澤山の螢がゐた。　さうして柳の下に小さい一艘の小舟が、半分岸に引き上げるやうにして置いてあつたのも、その螢の光でよく見えた。　その後も水の上をすいと飛んだかと思ふと、忽ち又眞黑の暗になつてしまふといふやうな螢は度々見たが、こんな花々しい、しかしながら又何となく物凄いやうな光景は、前後もう二度とは見なか

技枝



利根川風景

つた。

朝、眼をさまして見ると雨が降つてゐた。俥を命じて早朝に香取神宮に參拜した。こゝのお宮もこんもりとした杉の森の中にあつて、お社も立派であつたが、鹿島神宮に比べて東京から參拜に便利なためもあらう、一體が都近い心持がして、もの寂びたところが少かつた。

宿に歸るとまだ八時前であつた。汽車に乗つて東京へ歸らうか、船に乗つて銚子へ下らうかと、父さんは暫く二階でぼんやりと考へてゐた。さうして遂に船に乗つて銚子へ下ることに決してから、十時の出船を待合はすまでの一時間半ばかりの間は、この旅中で父さんの心持の一番落付いた、ものなつかしいやうな、うら悲しいやうな心持のした時であつた。その時のことを少し詳しく話さうか。

ぢつと耳を澄ますと雨垂の音が聞える。こゝが利根川べりの宿であるといふことは固より忘れることは出來ぬ。障子をあけるとうすら寒いが、障子をしめきつてしまつて、殆ど何も目に入るもののない座敷に、兀然として坐つてゐることも亦堪へられないことであつた。そこで障子をあ

銚子　千葉縣海上郡銚子町。利根川口の港灣。

茸

けた。どこの港町にもよく見るやうに、中央には川が流れてゐる。それを夾んで二筋の道があつて、その兩側に人家がある。父さんの泊つてゐる宿もその中の一軒であるが、川を隔てて向うの家並の中にも何とかいふ宿屋が一軒あつた。川の兩岸を通る人や車は極めて稀だつた。一軒の家から鍋や釜を持つた一人の女が、頭に手拭をかぶつたままで、雨にぬれながら川岸の石段を下りて、その川の水で鍋や釜を洗ふのが、目立つて見えるほど人影は少かつた。けれどもその代り兩岸近くもやつてゐる苫を葺いた船は、氣持のいゝ程ぎつしりと詰つてゐて、その中に僅かに空いてゐる水道を、絶えず櫓を漕ぐ船や、棹をとる船が上つたり下つたりしてゐるのが、いかにも港町らしい一種の心持を傳へる。それらをぢつと見てゐるといふことも、その場合、父さんにとつて堪へがたい淋しさであつた。

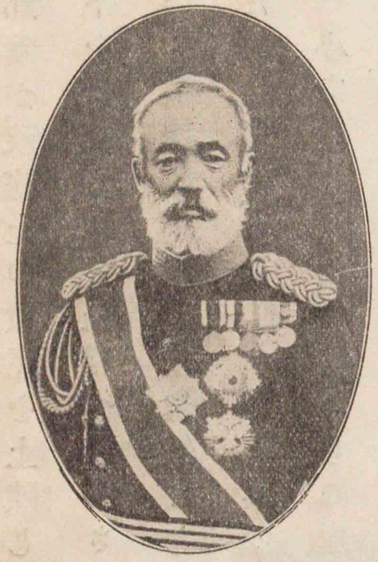
十時前になると、川蒸氣は二三度汽笛を鳴らした。

服部他助　元學習院教授

長府　山口縣豐浦郡長府村。

一七　乃木大將の舊宅

服部他助



長府停車場を出ると、すぐ海岸に沿うて古い松林がある。此の松林を離れて、次第に町の中央へと歩を進めると、其の昔、乃木大將の嚴父十

觸(触)　與(與・与)

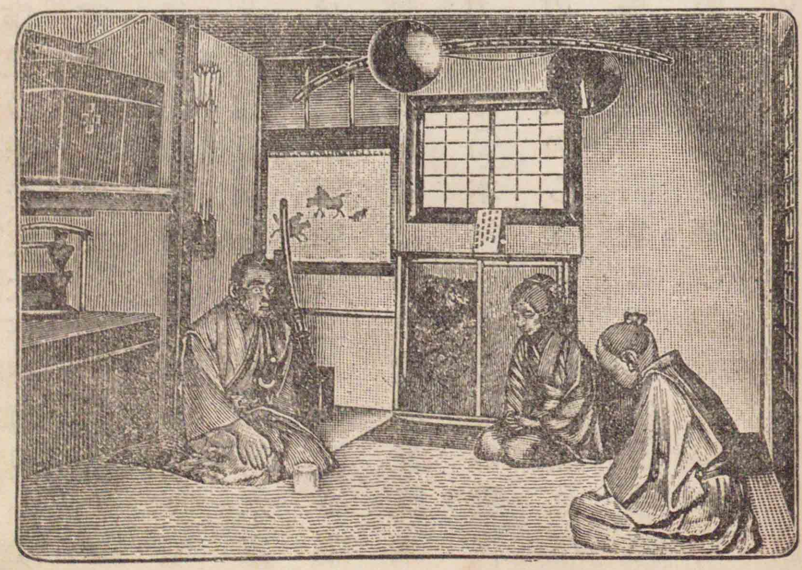
郎翁が、政務上の意見を上陳して藩主の忌諱に觸れ、國元差下を命ぜられて長府へ歸着された時、一先落ち着かれたといふ宿屋の小串屋が依然として存し「定宿」と古風に書かれた古行燈が、昔を語り顔に其の軒下にかゝつて居る。

小串屋の西南、程遠からぬ處に、「二宮神社」といふ小祠がある。

其の隣の横枕といふ小路を尋ねると、其處に「乃木大將舊邸址」と書いた木標が立つて居る。此の邸址こそは最も興味ある場所で、其の廣からざる二百二十餘坪の邸内にあるものは、家屋什器より一木一草の微に至るまで、無限の敎訓を我等に與へる。就中特に我等の注意を惹くものは、邸内の片隅に建てられた、實に見る影もない矮小な家屋である。

總(総・惣)

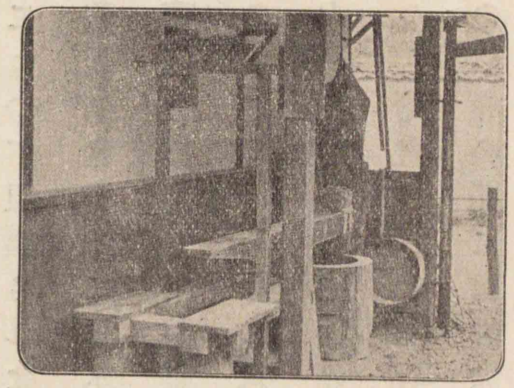
此の家屋は長府の有志者によつて組織された乃木大將記念會が、特に乃木大將の舊宅を摸造して建築したもので、總建坪僅かに八坪二合、六疊と四疊と二坪の土間とから出來てゐる。而してその六疊の間には、故大將と父翁並に母刀自との三體の木像が安置されてある。此の



簟蕈

木像は故大將の甥長谷川榮作氏の作で、故大將が兩親より教訓を受けて居られる樣を寫したものである。

又、嚴父十郎翁が舊藩主から拜領された蒔繪の棚を初め、代々乃木家に傳はつた武器、卽ち二本の槍こ薙刀・弓・矢・陣笠・流鏑馬用の綾藺笠・箙・具足櫃・刀掛・簟笥・本箱・机、其の他の遺物が、此の座敷から次の四疊の間及び屋根裏等に配置されて、其の當時の有りのまゝの光景を示して居る。



米搗臼と本置臺

殊に珍しく感ぜられるのは、屋根裏を利用して一種の物置を造り、これに武器その他の器具が巧に置いてあることである。夜具の如きも、大風呂敷に包んで、綱車で上げ下しする裝置にして屋根裏に吊してある。これは、此の家屋が、もこ門長屋であつて、天井がなかつたために、十郎翁の特に工夫されたものであるこいふ。

器(器)　鹽(塩)

其の他、鍋・釜・竈等を始め、挽臼・敷盥・母刀自が内職の鹽煎餅・砧巻等の製造に使用された大きな古木の盆がある。故大將が令弟眞人氏を相手に米麥を精げた「だいがら」卽ち米搗臼が、屋外の小庇の下にある。また故大將が米麥を精げながら讀書する便に供されたこいふ本置臺が、小さな板で踏板の上に作つてある。

麗（䴡）

丘淺次郎　靜岡縣の人、理學博士。

此の粗末極まる矮屋こそ、我が乃木大將の舊宅で、其の當時如何なる大邸宅にも、否如何なる宮殿にも、見出すことの出來ぬ嚴めしさと麗しさとの充ち滿ちた家庭の組織されて居た處なのである。（「恩師乃木院長」に據る）

うつし世を神さりましし大君の
みあとしたひて我はゆくなり　（乃木希典）

出でましてかへります日のなしときく
けふの御幸に逢ふぞかなしき　（乃木靜子）

一八　蒔かぬ種は生えぬ

丘淺次郎

「蒔かぬ種は生えぬ。」とは、よく人の言ふ諺なり。「骨を折らざれば成功せず。勉強せよ。勞働せよ。」といふ意味にては何人も疑ふものなし。然るにこゝに怪しむべきは、生物については「蒔かぬ種の生ゆる如き考を有する人の少からぬこと是なり。

昔は、蛆は肉などの腐れる處に自らわくものと信じ居たり。然るにイタリヤのレヂと云ふ學者は、「實驗によりて、此の事の實否を確めんとし、「細き金網にて肉をおほひ置きしに、何日を過ぎても、何程肉は腐りても、蛆は一匹も生ぜざりき。かくて蛆は決して種のなき處に自然にわくものにあらず、その實、「蠅の來りて卵を產みつくるにより、それの孵化して蛆になることを確め得たり。

レヂ　生物學者にして詩人、約三三〇年前歿。

綱網

蠅（蝿）

基　墓

或は云はん、「生物學上蒔かぬ種の生えぬ事を知り得たりとて、人間生活の上に何の益かあらん。」と。これ大いに然らず。試に見よ、近年大いに進歩したる消毒法の如きは、全く此の理を實地に應用したるものにあらずや。　若し病氣の基となる微細の生物が、種なきに自らわくものなりとせば、現時の消毒法は何の用をもなさず。　又かの食物の罐詰なども、物の腐敗するは、目に見えぬ小さき生物の働なれば、此の生物の種の舞ひこまぬやうに、食物を封じ置けば、何時まで置きても腐らぬ筈なりと云ふ理由より案出せる法なり。

此の他、蒔かぬ種の生ゆる如く誤りをることは少からず。これ何れも觀察の粗漏なるが爲か、又は推理の精密ならざ

屢（屡）　幅　福　輻

るが爲かに外ならず。　例へば、新に掘りたる池に、翌年より蜆のわきたりといひ、或は鰻の生れたりと云ふが如きは、屢、聞く所なり。　なるほど、一通り考へたるところにては、此等の動物は、とても乾きたる地面又は空中を飛びゆく力はなければ、山の高き處に新しく掘りたる池などに移る筈はなし、全く其處に自然にわきたるに相違あらじと思はるれど、更によく研究すれば、鰻・蜆などに、遠く隔たりたる處に行く力全くなしとは言ひ難きを見るべし。

鰻は元來海中に孵化するものにて、初は幅廣く、透明にして、白魚の如き形をなせども、成長するに從ひて身體次第に縮り、幅も狹くなり、色も次第に黑くなりて、所謂「はりうなぎ」

溯・遡

閉閑

に變ず。　この「はりうなぎ」は幾千幾萬となく群をなして河を溯り、次第に細き溝などに進み、雨降れば道路を横ぎり、草の間を這ひなどして、上へ〱と進み行くものなれば、終には山の頂に近き池にも達することを得べし。　鰻の發生する模樣は、近年まで詳しくは知られざりしが、今日にては、その次第も明瞭になりて、從來海濱にて屢、人の採集したる「びいどろうを」は、全く鰻の幼兒なることを確め得たり。

貝類の新しき池の中に生ずるは、一層不可思議なるが如くなれど、これにも同じく外より移り來る道なきにあらず。貝類の幼兒は、二枚の殼を開閉して、雁・鴨などの羽毛に附着することあれば、一方の池より他の池に貝の種の舞ひこむことは、決して珍しきことにあらず。　現に東京帝國大學の某教授が銃獵に獲たる鴨の足に、大きなる貝の挾み附き居たることもあり。　されば、よく研究すれば、貝類の如き餘り運動せざる動物にても、遠方に速かにうつり行く手段は有るものと知るべし。　從つて前年掘りたる池に、今年貝の居たればとて、直ちに「此の貝はこの池にてわきたるものなり、他より來れるにあらず。」と斷定するは輕率の譏を免るべからず。

もとより、世界は廣く、人間の知識は極めて淺きものゆゑ、何處如何なる時に於ても、種なしに生物は決して生ぜざるものなりとは斷言するを得ざれども、ともかくも今日まで

獵（猟）

斷（断）

川路柳虹　名は誠、東京の人、詩人。

の經驗によれば、「蒔かぬ種は生えぬ。」と云ふ諺は、直ちに取つて之を生物學の方面に用ひても、少しも誤あらざるなり。

（「簡易動物學講義」に據る）

○

身から出たさび。
瓜の蔓に茄子はならぬ。
積善の家には必ず餘慶あり。」

一九　朝

川路柳虹

朝は晴れたり
友よ立て、
空ははるかに
色澄みて、

勞働

高きおもひにくもりなき、
聖者のひとみしのばしむ。

朝は晴れたり、口すゝぎ、
この曉の生まれゆく、
空のさなかに神ありと、
靜かにおもへ、汝が胸に。

日に照らされて煙るもの、
遠き山なみ、町の屋根、
今、勞働のほめうたの
さけびとも聞く汽笛の音。

特待侍持

五十嵐力　山形縣の人、早稻田大學教授。文學博士。

朝は晴れたり、いざ立たん、
われら恃むはみづからの、
いとなみつくる力のみ、
いざ、わが路を踏みゆかん。

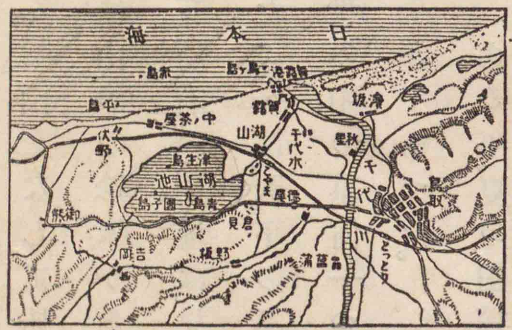
二〇　湖山長者

五十嵐力

山陰線の鳥取驛から西の方へ二里ばかり行くと、鏡のやうな大湖水がある。湖山池といつて、周回四里近くもあらう。西南の方には丘陵や小山が波のやうに起伏して、春は爛漫たる紅白の花に彩られ、夏は滴る樹々の翠に潤され、秋

荻荻　網・綱

は燃えたつ千入の紅葉に飾られる。東北の方には田畑が廣々と連り、砂丘を隔てて、遙かに渺茫たる碧の海を望むことが出來る。かやうに山と海とのえならぬ眺を兼ねた上に、湖面には、時々蘆荻の生ひ茂つた間に鷺鷗の閑眠を貪るのが見え、又仙人めいた舟子の網を擧げて細鱗を捕るのも見える。景色の雅なこと、誠に一幅の名畫を展げたやうな趣がある。



昔、和泉式部の父大江雅輔湖山に在り。式部亦この地に生れた。式部の歌に
春立てば花の都を見てもなほ霞の里に心をぞやる
とあり。ために湖山池の別名を霞湖といひ、この地を霞の里と稱するに至つたと傳へられてゐる。（田中阿歌麿、湖沼巡禮）

湖沼巡禮と湖山池附近

今は昔、このあたりに湖山長者といふ名高い豪家があつ

侯　候

數（数）

た。住家は王侯の宮殿のやうで、その中には金銀財寶が積んで山をなして居た。着るには美しい綾錦があり、食ふには山海の珍味があり、使ふには數十百人の婢僕があり、そして所有の田地は、見渡すかぎり廣々と、稻の波を打つて居た。たとへば、天下の富を此處に集めたかと思はれるばかりで、世の中の事、何一つ、この長者の思ふ儘にならぬものはないやうであつた。

ある年、夏の田植時のことである。湖山長者の家では、季節中の最上吉日をトして、その廣田に田植をすることになつた。長者の家に使はれてゐる者は勿論、近郷・近在の者ども迄、今日こそ長者の田植だといふので、老幼男女數を盡し

苗　笛

て、身支度かひ〴〵しく、我も〳〵と田圃をさして出掛けて行く。長者は高殿の欄干に凭れて、目も及ばぬ田地を遙かに見渡しつゝ、己が限ない富に、思はず得意の微笑を漏してゐた。

仕事は面白いやうに捗つて、早苗を取る男女の手の動く度毎に、濕つた黑い土の色が、片端から青く〳〵變つて行く。そのうちに正午になつた。やがて夕暮近くなつた。仕事はめき〳〵と運んだが、名に負ふ長者が廣い田地のことであるから、植ゑるに果てしなく、まだ數段殘つてゐる中に、日ははや西の山に入らうとした。

長者はこれを見て、あゝ、今少し日が高くば、全體めでたく

濟（済）

濟まうものをと、暫し深い思に沈んでゐたが、つと立つて、黄金の扇を持つて來て、さつと開いて、今しも沈まうとする夕日を三度までさし招いた。

見る間に、山の端にかゝつた夕日は三段ばかり昇つて來た。田に立つてゐた村人たちは、天道樣を左右する長者の威力を見て、いかに驚いたであらう。かくして、これまでと思つた田植も思ふまゝに捗つて、その日は無事に暮れた。

寢覺の牛の聲がゆるやかに響いて、夏の短い夜は、やがて明けた。朝の床を起出でた長者は、入日を招き返した喜と心おごりとで、眼中いよ／＼何物もない。傲然とした態度で、召使や村人達を呼んで、「昨日一日で植ゑあげた田の樣子

衰衰

を見て來い。」と命じた。ところが、出掛けて往つて、誰一人、腰を拔かすばかりに驚かぬ者はなかつた。

驚くのに無理はない。

見よ、さしもに廣かつた長者の田地は跡形も無く消えて、漫々と湛へた湖が、朝嵐に白い波を立てて居るではないか。數千人で一日植付けた早苗は一本も見えないで、渚には群立つ蘆が波に洗はれ、風に戰いで居るではないか。

長者の家は、この時から一日々々に衰へた。そしてつひに、この廣い田と同じやうに、全く亡びてしまつた。

（「趣味の傳說」に據る）

藤井乙男 兵庫縣の人、紫影と號す。

除 徐

醫（医）

二一 燈臺守

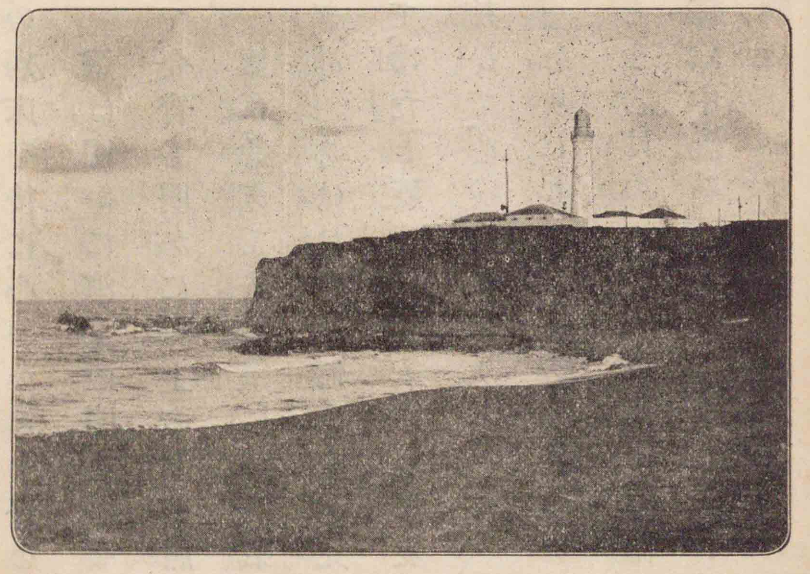
藤井乙男

佛蘭西の西岸に近き某の島に燈臺あり、マトローといふものこれを守りぬ。

或日、マトロー燈臺に上りて、常の如く掃除をなし居たりしが、俄かに重き病さし起り、掃除半ばにしてその室に下り、そのまゝ床に就けり。マトローの妻は心を竭して夫を看護せしが、病些かもおこたらず、氣息奄々として死期の遠からざるを覺えぬ。醫藥效を見ず、賴む所は唯神のみ。妻はひたすら神に祈りぬ。

かくする程に夕暮は迫りぬ、黃昏の色は漸く海を蔽ひぬ。病の床は離るべからず、床を離れば、瀕死の夫を如何にせん。燈臺の燈は點ぜざるべからず、燈を點ぜずば、夜の船路のしるべを如何にせん。夕暮は益々深くなりぬ、黃昏は海を蔽ひつくしぬ。吾等の務なり、吾等の務なり、務は曠しうすべからず。妻はかくかく思ひさだめぬ。かくて、夫

瀕 頻



闇・暗　脣(唇)

の病床を後に、心ひかるゝ身を起して、妻は燈臺に上りぬ。

燈は明かに海上の闇を照せり。夜の船路のしるべとして、今宵も明かに海上の闇を照せり。

妻は急ぎて夫の室に歸り、氣づかはしき瞳を病の床に注ぎぬ。あはれ、妻は何事をか見し。最後の息は、この時絶えて、冷たき脣は見る〳〵色を變じゆけるなりき。妻は顔を掩ひて、心ゆくばかり泣きぬ。

をりしも、二人の兒驅け來りて、燈臺の燈の回轉せざるよしを告げぬ。この燈臺は、回轉式のものなるを、マトローの掃除中、機をはづしたるまゝ下り來りければ、さては、かく回轉せざるなりけり。

骸駭　健建

若し捨て置かば、出入の船の見誤りて如何なる椿事もや起らん、捨て置くべきにあらずと、妻は夫の骸を守りもあへず、直ちに臺に到りて機を裝置せんとせしが、幾度試みても機は外れて、依然として回轉せず。今はせん術なくて、十歳を上なる二人の兒を呼び、その小さき手もて、夜もすがら、燈を回轉せしめぬ。

燈は回轉しつゝ、海上の闇を照せり。夜の船路のしるべとして、今宵も回轉しつゝ海上の闇を照せり。

悲しき一夜はかくて明けぬ。この夜安全に島邊を航せし船は、たゞ常の如く明かに、常の如く回轉せるこの燈臺の燈を望みて、健氣なる妻と子との心盡しの如何ばかりなり

擧(挙)

水野廣德　松山市の人、海軍大佐。
北太平洋　赤道以北。

しかを想はざりしなるべし。何ぞ知らん明かなる燈光は、是悲しき妻の眞心の光にして、回轉せる燈影は、是いぢらしき兒の夜の目も合せず務めたる丹誠の働なりしことを。

この夜のことは後に至りて傳へられ、世人は擧りてこの健氣なる行爲を賞揚し、幾多の新聞社は、この誠意公に奉じたる母子のために義金を募りぬ。

あゝ、ありし一夜の燈は、如何に清き光を放ちて、島邊の暗き波の上に、影美しく輝きけん。

二二　海のスコール

水野廣德

北太平洋の暴風雨に苦しみ、初めて見る外國の文明に、目と心とを驚かした半年の遠洋航海も、はや終に近づいて、あと一週間もすれば、懐かしい日本へ着くのだ。

水野廣德

あのかはいらしい人形や美しい鉛筆の土産を遣つたら、妹や弟は、どんなに歡ぶであらう。あの珍しい寫眞や綺麗な繪葉書を見せたら、お祖父さんやお祖母さんは、どんなに驚かれるであらう。

それよりも、日本へ着いたら、何を一番先に食はうかな。毎日々々罐詰と馬鈴薯だけでは、やりきれない。饅頭も食ひたいなア、てんぷらも旨いなア、漬物で茶漬も結構だなア。

歡(歓)

薯　署

檣 牆(墻)

あゝ早く日本へ着けばよいのに。

若い候補生は、そんな事を考へながら船橋(ブリッヂ)の上に立つて當直してゐる。

どちらに向いても、山もなく島もなく、往來(ゆき)の船の影さへも見えない。目の及ぶ限り、たゞ波と雲ばかりである。はてしもない海は、油を流したやうに、とろんこに凪いで、翡翠(ひすゐ)のやうな深緑を湛へてゐる。ゆるやかなうねりが輕く船を搖る毎に、風に飢ゑて、べつそりとした帆が、ばた〳〵とだるさうに檣(マスト)をはたく。

眞夏の空は薄紺色にすみわたつて、水天の際には、くつきりと鮮かな一線を劃し、淡い白い雲のかたまりが、二つ三つ

圍(囲)

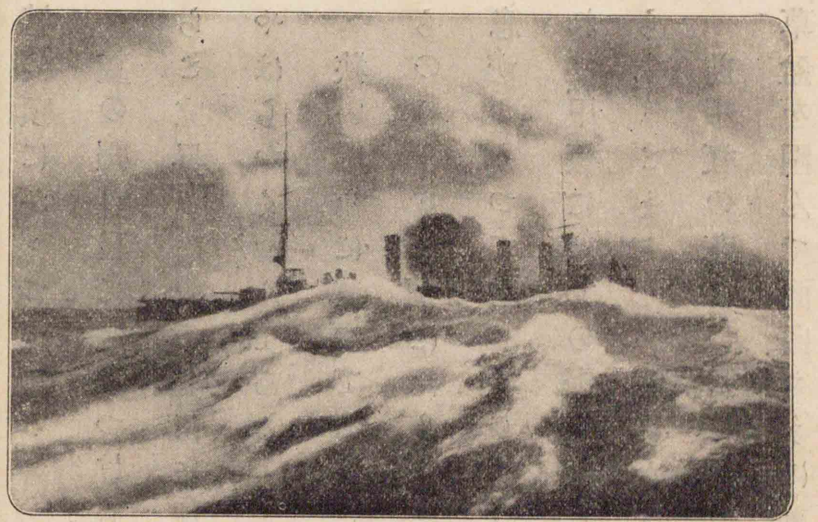
檣の頂にかゝつてゐる。

夏の強い日に照りつけられて、甲板からは陽炎(かげろふ)がゆらゆらと立昇る。板の縫目に流した黒いピッチが、日に熔けて、やはらかく膨(ふく)らんでゐる。

狹い艦橋に立つてゐると、額から、襟筋から、手首から、あぶらのやうな汗が、にた〳〵とにじむ。暑いこと、暑いこと。息がつまつて目が廻りさうだ。士官も水兵も日蔭にかくれて、甲板には人の影もなく、錆色に塗つた大砲ばかりが、ぎら〳〵とまぶしい程にかゞやいてゐる。

前甲板の蔭には、日に燒けて眞黒い顔をした水兵達が、煙草盆を圍んで、面白さうに、きやつ〳〵と騷いでゐる。多分

舷絃弦



外國の港に上陸した時の失敗談でもしてゐるのであらう。

船は進むでもなく退くでもなく、殆ど一處に停止してゐる。船首の切波もなければ、船尾の引波もない。これでは一時間に一海里も進まぬであらう。いつ日本へ着くことやらじれつたくてたまらない。

だるい足をひきずつて、狭い艦橋を、右舷から左舷へ、左舷か

墳憤噴

ら右舷へ、こつり〳〵散歩する。

ふと前方の海面に黒い物が浮んでゐるのを發見した。暗礁のやうに、破船のやうに。雙眼鏡で見ると、岩の上から噴水が高くほとばしつた。鯨ぢや〳〵。

あちらに沈んだかと思ふと、こちらに浮んで又潮を噴く。面白いぞ〳〵。鯨に追はれた何千何萬の鰯や小魚が、靜かな海面に瀨を立てて逃廻る。

どこから來たともなく、いつ湧いたともなく、澄みきつた空のあなたに、白い一かたまりの雲が現れた。と思ふと、雲は見る〳〵中にひろがつて、色は次第に黑味を帶びて來る。

驟風雨來！　きびしい暑さに眠つた樣な艦内は、俄かに

號（号）　皺　雛

緊張して來た。士官の號令がかゝる、傳令の號笛が鳴る。艦長も副長も艦橋に現れた。雲の走りと波の色とをうかゞつてゐる。士官も水兵も帽子の顎紐しめて、號令一下、持場に就かんと身構へてゐる。

どろんこによどんだ海の面には、いつしか漣の小皺を寄せて、はや艦側を、ぺちや／＼と嚙始めた。だが風はまだ來ない。

副長の號令が下つた。百尺の檣頭には勇敢なる水兵達が、一條の索に身を託して、猿の如く敏捷に帆を疊んでゐる。甲板には數十條の帆索が入亂れて、「張れ」「緩め」の號笛が忙しくにぎやかに響く。

紋　絞

灰色の雲は、はや檣頭まではびこつた。ひや／＼とした風が、さつと吹いて來る。ぺつそりと裾を垂れた帆は忽ち膨んだ。船は風下に傾いて、速力は俄かに増した。

大粒の雨が、ぼつり／＼と、白く乾いた甲板に飴色の紋を打つ。海には白波が競馬のやうに駈ける。風は次第に強く、帆縁（ほべり）がびり／＼とふるひ、檣がぎい／＼と鳴る。雲は滿天にみなぎつて、篠つく雨に甲板は水煙に煙つてゐる。電はひらめき、雷はとゞろく。天暗澹、海冥濛。

三十分前死せるが如く靜かであつた海は、忽ちにして疾風迅雷、白波さかまく荒海と變じた。あまりの熱さに海の神の癇癪玉が破裂したのであらう。

浴

驟風雨に對する船の準備は出來てゐる。風よ吹け〳〵、雨よ降れ〳〵。水兵達は素裸となり、隆々たる筋肉を雨に打たして、心地よげに天水浴をやつてゐる。

驟風雨は過ぎた。雨は止んだ。風は靜まつた。たゞ海には名殘の波が、なほ騷いでゐる。

半ば西に傾いた太陽が、雲の切れ目から何知らぬ顔して、再びけろりと姿を現した。が、最早以前ほど猛烈な炎威を振ふ力はない。

ぬれた甲板や帆からは、淡い蒸氣が靜かに立昇つてゐる。涼しい風が快く海の香を送つて來る。

水上瀧太郎　本名は阿部章藏、東京の人、文學者、明治生命保險株式會社員。

夏の驟風雨ほど、船乘に取つて豪爽清快、しかも油斷のならぬものはない。

二三　無線電信

水上瀧太郎

水上瀧太郎

「日本に通ずる無線電信は、今晩でおしまひです。」と、電信局の人が注意に來てくれた。

カウカイブジ。

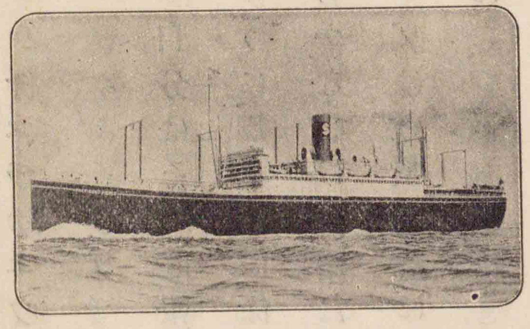
といふやうなのが、いくつもいくつも繰返されて居る。自分も父母を喜ばせるために、何かひとこと言ひおくらうと思つたが、無事といふ以外に、言ひ

景樹　香川氏、桂園と號す、因幡の人、江戸時代末期の歌人。

たいことは何もない。　たゞ、無事といふだけでは、あんまり物足りなさ過ぎるので、手帳を出して、あれこれと、近頃の自作の歌の中から、適當なのを選ばうと思つた。

景樹の流を汲んで和歌をよくする母は、自分たち兄弟姉妹が、時折家を離れて旅にでも出た時とか、或は母自身が家を留守にした時には、必ず我等に對して、子を思ふ親心を、三十一文字にこめては、書きおこすのだつた。　見やう見まねで、兄も姉も、幼い時から歌をよみ習ひ、母から送られた時には、返しをするといふ風だつた。　自分もいつかそれにならつて、旅好きの身の、旅先から、強ひても母の好きさうな古風な歌を詠みだしては、書送るのを習としてゐた。

誇跨袴



丁度この夏も、自分は、自分の拙い歌を拙い文字に認めた、行くさき〲の、うまやちからの繪葉書が、いかばかり母を慰めるかを思ひ、また知る人の訪ひ來るまゝに、いかに母が誇りかにその人達にそれを示すかを想像しながら、筑紫路の旅に日を暮らしたのだつた。

しかし、今自分の手帳には、旅の歌が一首もなく、船に乗つてからも、時折はきれ〲に浮ぶ想を歌はうと努めはしたけれども、何故か、どうしてもそれがまとまらなかつたのだつた。　幾たびも〱短いありふれた句を、手帳に書い

隱穩

ては消し、書いては消ししたあとで、あれこれとつなぎ合せて、やつと次の一首にまとめた。

ヤスラカニウミノイクヨハアケニケリ、
チチハハノイヘコヒシトオモヘド。

自分はその電報が、恰も父の寢酒の時刻にわが家に着くやうに、無線電信係の人に賴みこんで、それで今日は一層安らかな心になつた。

父は近頃とみに量の少くなつた酒に陶然としながら、「なんだ、つまらない。」といふやうな顔をして見るにちがひない。しかし、その心中の嬉しさは、隱さうとしても隱しきれず、見ないやうな風でゐながら、電報の歌を誦するにちがひない。

松平信綱　德川幕府の重臣。武藏忍城、後に河越に治す。寛文二年（約二七〇年前）歿、年六十七。

母はもうたまらなくなつて、目がしらに涙をにじませながら、幾たびも幾たびも口吟んだ後、妹にも、弟にも、さては女中達にまでも讀聞かせるにちがひない。　明日からは、あの夫人、その奧さん達に逢ふ毎に、わが子の歌を唇に上せるにちがひない。　自分にはよくそれが見えるのだつた。（海上日記）

二四　智慧伊豆

大町桂月

智慧伊豆とは、松平伊豆守信綱のことなり。その伊豆守が智慧の名稱を獨占せるは、如何なる功業によるかと討ぬるに、格別の功業はなし。　伊豆守は老中となりたり。　されども、老中となりたればとて、特に智慧の名稱を得らるべく

島原の亂 天草一揆ともいふ、耶蘇教徒が肥前の島原城に據つて起したる亂、寛永十五年二月に平定せり。

將軍 三代將軍德川家光。

もあらず。伊豆守は島原の亂を平げたり。されども、島原の亂を平げたればとて、特に智慧の名稱を得らるべくもあらず。さらば「智慧の名は何によりて得たるか。

或時將軍鷹狩して雲雀を多く獲たり。休息の際、將軍これを味はんとす。急のことゝて老中ども雲雀を金串に刺して燒くに、火強く、手先熱して堪へられず、「急げば急ぐほど早く燒けず、」大いに困りゐたり。伊豆守後れて來り、傍に木片あるを見出し、それを金串に刺して燒くに、火熱手に及ばず、やす〳〵と燒くを得たり。しかも最も後に燒き始めし伊豆守が最も早く燒き終へたり。他の老中ども舌を卷き「平日の勤はとても伊豆守に及ばず、斯樣なる假初のことだにも仕負けたり。」とて笑ひたりといふ。これ一場の頓智なり。されど、これを以て智慧伊豆の智慧を證明すべきには非ざるなり。

和田倉橋 江戶城の東北の濠に架したる橋。今宮城正門前御苑の東北にあり。

八重洲河岸 丸の內、大手外郭の南。內濠に沿へる一郭。

或時將軍御堀にて小鷹狩ありしが、和田倉橋邊にて堀の水禽を逐立てよと命ず。然るに、何處を見ても小石なし。伊豆守ふと傍の店に蛤を賣り居るものあるを見てこれを買取り、石のかはりにして、これを投げ、水禽を逐立てたり。これも一場の頓智なり。されど、これを以て智慧伊豆の智慧を證明すべきには非ざるなり。

或時將軍朝鮮人の曲馬を覽んとて、八重洲河岸に馬場を構へさす。事急なり。土堤を築かんは、なし得ぬにはあら

二代將軍
德川秀忠。

ねど、忽ち築きて忽ち取除かんは、無益なり。乃ち伊豆守の指圖にて籠屋に命じ、數百千の竹籠を編ませ、其の上に芝を置かせて、瞬く間に晴の馬場を造り出しぬ。これも一場の頓智なり。されど、これを以て智慧伊豆の智慧を證明すべきには非ざるなり。

以上の如き逸話は一々枚擧するに遑あらず。少年時代の雀取りの失策は有名なる話なれば誰も聞知りたらん。二代將軍が「以て大事を託するに足る。」と感ぜられしも宜なりけり。この一事は以て伊豆守の人となりを知るに足るべし。おのれは八裂にせらるとも主君の過失を言はず、世にも頼もしき人なるかな。

實父　大河内久綱。
養父　松平正綱。

智の有無は生れつきにもよれど、少年時代よりの心掛の如何にもよるなり。請ふ伊豆守が如何にして智を得たるかを見よ。或人伊豆守に向つて「如何にして智を得たるか。」と問ふ。答へて曰く「これ我一人の力にあらず。何人の智も、もと格別の差なきものなり。若し我に智ありとせば、そは此の物のお蔭なり。」とて足を見せたり。その足の甲に畏まりだこ四つ五つあり。足の甲にたこあるは、正坐謹聽に慣れたればなり。伊豆守曰く「我が實父も養父も家康公・秀忠公に召使はれて、御才覺と御家法とを能く〳〵存じたり。我は幼少の頃より正坐して、實父養父の教を謹聽せり。又秀忠公・家光公の御側に晝夜相勤めたれば、御次ぎに丸寢

嗚 鳴

揮 輝

四代將軍 德川家綱。

祕(秘)

して、段々承る事を熟考したり。かくて、足にはたこが出來たり、心には才覺が出來たり。」と。嗚呼、伊豆守の智慧は正坐謹聽の賜なり。今の世の青年多く放縱我執に陷れり。大成せざるも宜なるかな。若し大成せんと思はば、伊豆守の足だこに就て反省せざるべけんや。

伊豆守の臨終は、殊によく智慧伊豆の實を發揮せり。伊豆守病んで將に死なんとせし時、三代將軍と四代將軍とより賜へる親筆の書を悉く取出させて、之を新しき藥研に入れて燒かせたり。而して、我が身と共に埋めよと遺言したり。何が故に伊豆守は將軍の手書を燒きけるぞや。其の中には世間に洩らすべからざる祕密の事もありしならん。されど、多くは伊豆守の功を褒めたるものなりしなるべし。子孫若し之を鼻にかくることもあらば、ゆゝしきことなり。故に一切之を燒きたり。我が身の死すると共に、我と我が功を自ら沒したり。嗚呼、これ智慧伊豆が智慧に相應する功業の世に現れざる所以なり。而して又智慧伊豆の智慧伊豆たる所以なり。

(桂月全集)

金子元臣 東京の人。御歌所寄人、國學院大學講師。

御殿場 靜岡縣駿東郡にあり、富士裾野の東端。

足柄山 神奈川縣足柄上郡と靜岡縣駿東郡の境にあり。

二五 富士山

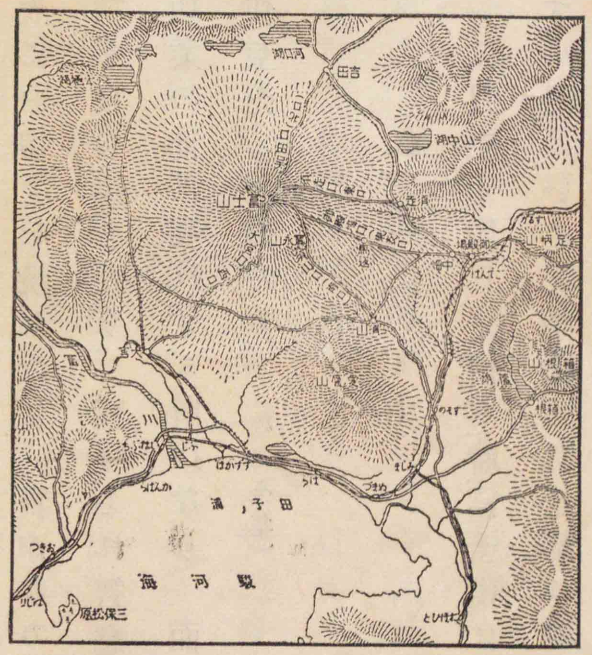
金子元臣

八月二十四日午前零時、富士山に登らんとて、御殿場を發す。

月はいま足柄山の頂を離れて、三尺ばかり天に上れり。その明かなること、恰も晝の如し。

—富士山—

抑、富士山は、四面かけ拂の山にて、擂鉢を伏せたる形したれば、いづれの方面にも登山口あり。東は須走及び中畑に、南は須山に、西は大宮にありて、皆駿河に屬し、北は吉田にありて、甲斐に屬せり。山の腰より上までを十合に分つ。一合の距離は、路の難易によりて長短定まらず。合の界に石室を設けて、登山者の休泊所となせり。今我が登ら



須走　御殿場の西北二里八町。
中畑　御殿場より登山する新道。
須山　佐野驛より三里。
大宮　東海道線鈴川驛より三里。
吉田　山梨縣都留郡福地村にあり。

仰
抑

箱根山 神奈川縣足柄下郡にあり。

愛鷹 靜岡縣駿東郡にあり。

んとするは中畑口なり。

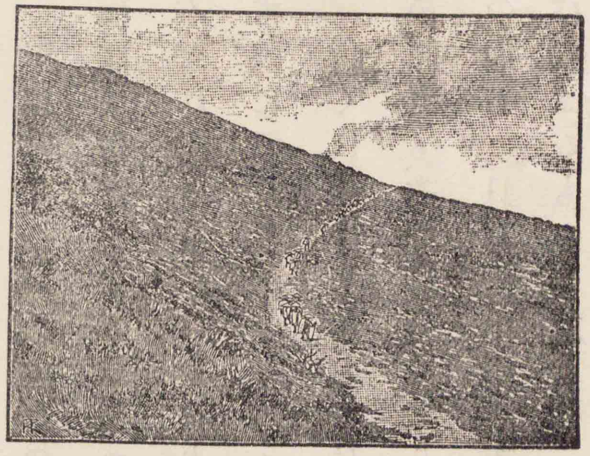
玉蜀黍や、芋の葉の、長く短くうつれる畑道を行過ぐれば、爪先あがりの草原なり。山百合・女郎花・撫子など咲きみだれ、露きら〳〵と光りて無數の玉を飾り、蟲の聲繁くして雨に似たり。

行くに隨ひてはじめは仰ぎ見し足柄・箱根の連山も、愛鷹の諸峯も、次第に低くなりて、岡の如く、堤の如く、はては平地の如し。只、富士山のみ、夜霧の奧に、巍然として聳え、我を喜び迎ふるものゝ如し。

風甚だ寒し。午前二時頃ならん、瀧川原の一軒茶屋に立寄りて、盛に火を焚きて煖を取る。

燒（焼）

馬返までは、なほ山の麓にて、いはゆる裾野なり。これより先は、路險しければ馬も利かずとてこの名あり。いつしか樅・檜などの林の間をゆく。月影梢を洩れて鹿子斑の雪かと疑はる。



草山三里

太郎坊にて金剛杖を買ふ。白木にて長さ五尺。こゝを出づれば、木盡き、草稀に、見渡すかぎりコークスのやうなる燒石・燒砂なり。生物の聲全く絶えて、只わが砂を踏む足音のみ虚空に高く響く。この山、俗に草

寶永山　寶永四年十一月噴出、高さ二七〇〇米突。

媛　緩

山三里、木山三里、禿山三里といへるが、木山の五合目まで續けるは吉田口に限り、他は大概二三合目までなりと聞く。

一合目に到れる頃、夜は頂上より明けそめて、次第に麓の方に及べり。折々眞白なる水氣襲ひ來りて衣を沾すは、雲の過ぎたるなり。三合目にて須山口の路と合す。寶永山は、六合目の左に峙ちて、その噴出坑と相對せり。忽ち、白鷺の點々として、下方遙かに動くを見る。近づけば皆白衣の富士道者なり。「六根清淨」と唱へつゝ、歩調緩かに上りゆく。山に醉ひたるならん、途にうち倒れて苦しめるを、同行の人の頻りに介抱するも見ゆ。

すべて、六七合目以上は、空氣稀薄なれば、人の呼吸數は、下

險（嶮・峻）
齒（歯）

界の二倍となり、火氣もまた弱くして、飯を炊くによく熟せず。糯米を加へて纔かに粘力を添ふとぞ。

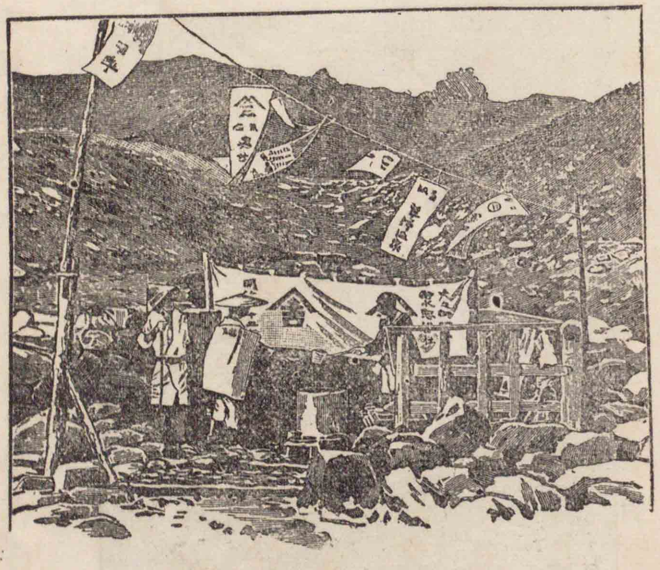
頂上を仰げば、殆ど落ちかゝらんばかりに聳え立ちて、一歩は一歩より險し。谷めきたる凹みに雪あり。潔うして、碎けたる銀の如し。勇氣を鼓して、掘りて之を嚙む。齒牙に徹りてつめたし。

八合目よりはいはゆる胸突八丁にて、岩石の間に、路なき路を求めて上るなれば、胸を突くはおろか、ようせずば、岩にて額を撲つべく、衣を裂くべし。

路の窮りたる處に、梯子二つかゝれり。午後一時、遂に頂上に達す。

八峯（劍峯・馬背嶽・釋迦嶽・雷電嶽・藥師嶽・觀音嶽・經嶽・駒嶽）
迹（跡・蹟）

頂上には、八峯環りて立てり。劍が峯最も高し。こゝに氣象觀測所あり。八峯の中間には、周回十五六町もあらんと思はるゝ、一大噴火口の迹あり。昔はこゝに水ありて、池を成しきとか。噴火口の外部をめぐるを、御鉢めぐりと稱す。その途中北に金明水、南に銀明水の二泉ありて、盛夏も涸るゝことなし。又東に缺間ありて蒸氣を噴出す。地



金明水

嘯（嘯）

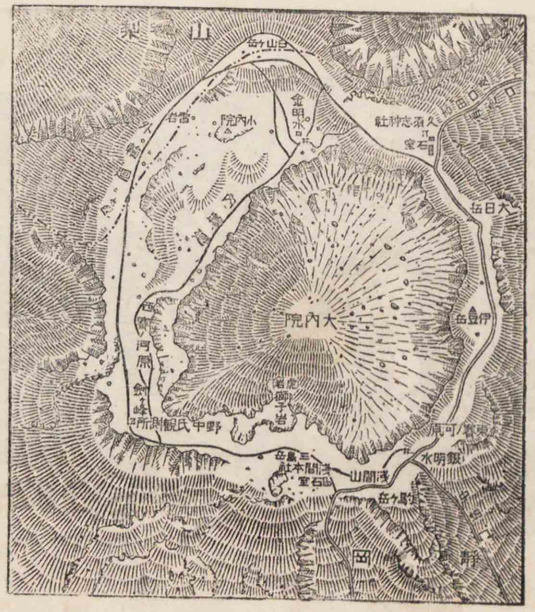
山中・河口　山梨縣都留郡にあり。

本栖　同縣西八代郡

富士川　日本三急流の一。富士山の西を流る。

三保の松原　靜岡縣安部郡

に手をあて、試みるに熱し。三十分にして、鷄卵を蒸し、酒を燗すべし。



お鉢めぐり

今や天に近づくこと一萬三千尺、杖を岩頭に立てて長く嘯けば、風起つて雲の飛ぶこと頻りなり。足柄・箱根の山々は、蟻垤の如く、山中・河口・本栖の諸湖は、杯水の如し。銀の針と見るは富士川か、青き絲と見ゆるは三保の松原か。駿河の海、相摸の

亙（亘）

木花咲耶姫　大山津見神の御女、瓊々杵尊の妃。

烙　洛

灘は、二つの鏡を並べたるが如くに光り、末は天と一つになれり。試みに掌を開いて掩へば、山も水も皆わが手中に藏まる。忽ちわが對へる空中に、富士山の影現はれたり。裾は山に亙り水を越えて數州をおほひ、色は紫紺にして優美鮮明なること喩へんに物なし。これを御影と稱す。朝日には西へ、夕日には東へ、その影現はる。

木花咲耶姫を祀れる淺間の本社を拜す。神官に乞ひて、杖には烙印、扇子・葉書などには朱印を捺す。

薄暮、社前なる石室に宿る。屋根の高さ九尺ばかり、太き木を骨組とし、岩に倚りて、石を疊みて造れり。廣さは二十疊もあるべし。疎き板敷の中央に爐を切りたり。醴酒を

踞裾据

沙・砂

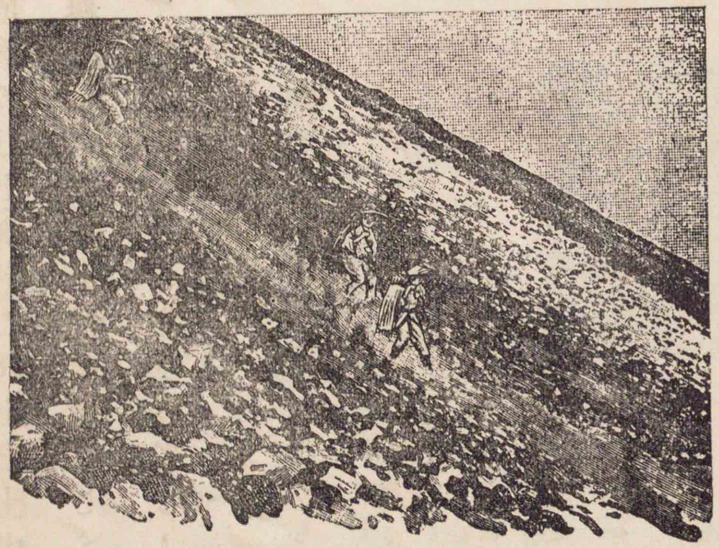
名物とし、三國一と稱す。携へたる布子を着、蒲團二三枚重ねて寢ねたるが、寒氣強くして目も合はず。未明に起きて戸外に出づれば、風は錐のやうに膚を刺し、使ひすてたる水は片端より凍りて、つらゝとなれり。乃ち立戻りて蒲團を身に纏ひて出で、岩の上に踞して日出を待つ。

天は淸く晴れたれども、脚下は薄黑き雲の波、一面にはびこれり。その雲、綿の如し。見る〱東の方ぱつと赤くなりしが、軈て紫となり、薄紅となり、遂に深紅色となる。さて瞬くひまに朱盆の如き日はさし昇りぬ。忽ちにして、百千筋の金光、きら〱として八方に散じ、天地全く明かなり。

降路は須走口に取れり。六合目より太郎坊までの間、砂

須順

の上を滑走して下るを砂走りと稱す。一度躍れば、杖も足も止まるところを知らず。只風の耳朶に觸るゝ聲を聞くのみ。この間に草鞋を破ること四足。木山を過ぎ裾野を通りて須走に着きたるは、二十五日の午前九時なり。登るには十餘時間を費ししもの、降るには僅かに二三時間、快なること甚だし。裾野の月、



砂走り

西條八十 東京の人、詩人、早稻田大學講師。

項上の日出・御影、これを富士山の三大壯觀とす。我は今一擧にしてこれを併せ見ることを得たり。山神の我を愛してこの稀なる幸を與へ給ひしにやあらん。

聞きしよりも思ひしよりも見しよりも
のぼりて高きやまは富士の嶺 （荷田春滿）

ふじのねの麓を出でてゆく雲は
あしがら山のみねにかゝれり （賀茂眞淵）

心あてに見し白雲はふもとにて
おもはぬ方にはるゝ富士のね （村田春海）

二六 母と蘆

西條八十

ふるさとの母をおもへば
片岡の蘆もなつかし
さや／＼と風のわたれば
なびきよる夕の穗波

わが母の眉をしのばせ
しめやかに雨ふる夜半は
そことなき葉づれのひゞき
おん母の聲音にまがふ

ふるさとの母をおもへば
かの青き蘆もなつかし

銀座　東京市京橋區にあり、最も繁華なる街。

少年時代、私は東京を離れて一年ばかり奈良の古都に近い田舍で暮したことがある。生れて初めて兩親の傍を離れたので、私は明けても暮れても東京の空を眺めては、あの明るい銀座の街の燈を戀しがつた。

私のゐた家の裏手は小高い丘になつて、そこには青い蘆が一面に生茂つてゐた。私の部屋の窓の障子をあけると、すぐ眼の前にそれが見えた。晝間は丘の上にコバルト色の空がのぞいてる。折々白い雲が流れた。蘆の中では葦切が玉を斫るやうな音をたてた。夕暮には何處からともなく次第に黑く煙のやうにせまる暮色のうちを、冷たい夕風がさや〳〵渡つてきて、蘆の細い葉をゆるがせた。私が

叫（呌）

一番好きなのは、この夕風にそよぐ蘆の葉を見てゐることであつた。あちらに黑く、こちらに白く、風に靡いて光りかげる蘆の穗波を見てゐると、それが色々に人の眉・鼻・口などを描くやうであつた。殊にそれが優しい顏附に見えたので、私は懷かしい母の顏を想ひだした。私はぢつと眼をつぶつて、その蘆の生えた丘の面一ぱいの大きな白い母の顏を想ひ浮べた。さうして、うすら冷たい風の中でひとり、

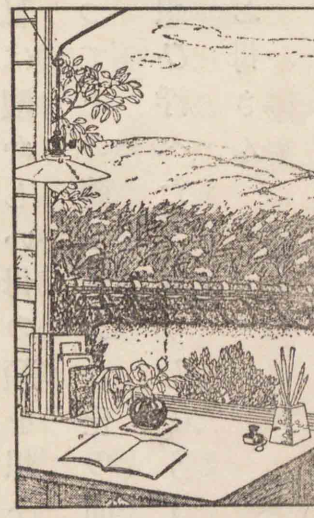
「お母さん」

と、懷かしく、涙ぐましく叫ぶのであつた。

また、その時分、私は毎晩一里の路をあるいて、奈良の町まで英語を習ひに行つた。嫩草山の麓に、ギンポールといふ

側則測

アメリカ人のお婆さんが住んでゐた。もう七十に近い年で、年中まつ黒い服を着て、赤くたゞれた兎のやうな眼に、大きな眼鏡をかけてゐた。その人に夕方の六時から七時まで、英語の讀方と發音とを教はり、それからあたゝかいおいしい紅茶を



御馳走されて、歸つてくる時分には、もう田圃の中の夜路は、とつぷり日がくれてゐて、蛙の聲だけが諸方にさびしく聞えるのであつた。

かうして、ひとり丘みちを下つてくる時に、兩側の蘆の葉

輪諭

のさら／＼とそよぐ音は、恰も彼等がないしようで、何かささやき合つてゐるやうであつた。時には多勢の人が、その葉のかげに集つて、何かひそ／＼話してゐるのではないか、と思はれることがあつた。さうしてその聲の中に、ことさら聞きおぼえのある、懷しい母の聲が聽きとれたやうに思へた。

しめやかに小雨の降つてゐる夜などには、とりわけさうした感じが深かつた。室へもどつて戸をしめて床についてからも、優しく諄々と諭すやうな母の聲音が、いつまでもしみ／＼と、耳もとにひゞいてゐるのであつた。

その頃の母こひしさの心を、私は「母と蘆」といふ名でこゝ

に歌つたのである。（新しい詩の味ひ方）

○

「迷兒の、迷兒の………」
どこからか、みんなが私を呼んでゐる。
　靜かな春の小夜更けて、
　遠い草野の人のこゑ。
わが身も今は年たけて、
二人の父であるものを。
　靜かな春の夜ふかく、
目をとぢれば聞えくる。
「迷兒の、迷兒の………」
　遠くから私をさがす鉦太鼓。

西條八十

杉村楚人冠　和歌山縣の人、名は廣太郎、文章家、新聞記者。

二七　ペンギン

杉村楚人冠

凡そ、天下にペンギンほど滑稽なものはあるまい。ぎよろりとした目玉を光らせて、人間のやうに、兩脚でよちよちと立つて歩く。背中には黑、腹には白の綿毛が一面に生えて、兩の翼が短く垂れてゐる。翼といつても短いから、飛ぶ譯には行かぬ。唯これで、一つには身體の調子を取り、一つには武器として敵と戰ふ。見たところは、さながら、小作りな人が、黑の燕尾服に、白のチヨッキ白のズボンで、兩手を振つて歩くやうだ。或種のペンギンは、丁度襟の所に黑い線があるので、まるで黑のネクタイを締めたやうにも見える。人間に似た所は、これればかりでな

譯（訳）

杉村楚人冠

辭（辞）
險　檢　儉
南極圈　南緯六六度半以南。
從（従）

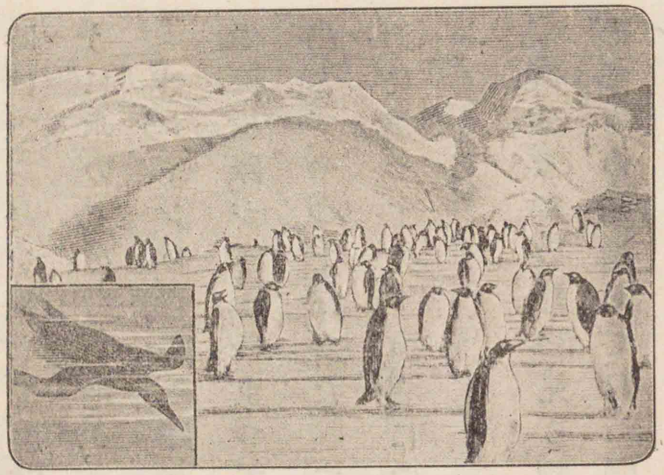
い。ペンギンとペンギンとが出會ふ時は、互にお辭儀をするやうな體で首を下げる。

又この鳥は大變な見え坊で、胸の白い處が一寸でも泥で汚れてゐると、仲間どもが例の顏を見合はせて、互に嘲り合ふ。こゝらも頗る人間に似てゐる。「善惡ともに、人間に似た所が餘り多いので、何だか、これを殺すには忍びなかつた。」と、或探檢家も云つてゐる。

春先、南極圈へ移つて來て、然るべき所へ銘々巣を作つてしまへば、農閑の伊勢詣とでもいふ風に、大勢團體を組んで旅行に出かける。その出かける時は、一人の總指揮官があつて、一同はその命に從つて、連れだつて行く。ペンギンの

栽裁

植民地ともいふべき處には、何十萬といふ大變な數が、一所



ペンギン

に集つて巣をくふが、その間に何等かの社會的制裁が行はれるものと見えて、餘り甚だしい喧嘩はしない。

ペンギンの種類は、色々あるが、その立つて歩くことは一つである。翼が小さくて、飛ぶことの出來ぬ者が、どうして海などを渡つて來るかといふと、これは泳いで來るのである。水では泳ぎ、陸では歩く。處で

瀉

シャックルトン　英國の南極探檢家、一九二二年歿。

敵に追掛けられたとか何とかで、大急ぎに駈出さうといふ時は、忽ち身を倒して、腹這になつて、一瀉千里の勢で、橇のやうに氷の上を滑り走る。その早いことは非常である。

ペンギンの音樂を好むのは有名な話で、シャックルトンの探檢隊が南極に止つてゐた時、時々蓄音機を氷の上に持出して、やつて見せた。すると、ペンギンが十羽二十羽と追追に集つて來て、遠巻に取圍んで、感心して聞いてゐたといふ。

何分、氷雪の外に見る物のない處とて、よく〳〵無聊に苦しむものと見えて、何か變つた事があると、ペンギンども隨分遠方まで見に來る。シャックルトンの一行が、自動車を

營（営）

動かしたり、冬營の小屋を建てたりしてゐるのが、ペンギン社會の大問題となつたと見えて、如何にも珍しさうに、熱心に見に來たといふ。

大勢づれのペンギンが、途中、人間か犬かに出會つた時は、大變である。假に彼方から人間が來たと見ると、ペンギン一同、遠くで、はたと立ちどまる。まづ一行中の雄が一羽出て來て、恭しく首を下げる。やゝ伏目になつたまゝで、何やらん長々と挨拶の言葉がある。不幸にして、人間には唯カカ、ガア〳〵と聞えるばかりである。挨拶の臺詞終つて後、初めて首を上げて、今度は、すつと仰向いて、嘴で大きな輪を一つ畫いて、さて、ひよつと人の顏を見る。「お分りになり

繰操

ましたか。」といふ風だ。
固より以て、お分りになるべき筈のものではない。人間は、ぽかんとして立つたまゝだ。こゝに於て、ペンギンは此奴分らぬなと見て取つて、「今一度、前の挨拶を長々と繰返す。それでも分らぬと見たら、今度は他のペンギンどもが、がやがや云つて承知しない。そこで、前に挨拶に出た奴は、大いに面目を失つて引き下る。すると、今度は別の雄鳥が出て來て、又前と同じカヽヽガア〳〵をやる。

相手が人間なら、譯の分らぬ長臺詞も、面白半分我慢して聞いてやるが、これが犬でゝもあつたら、それこそ騒だ。シヤックルトンの探險記の中にある話だが、或時ペンギンども、右の順序で犬に挨拶をしたが、固より犬に分らう筈はない。そこでペンギンが腹を立てゝ、「三羽一時に例のカヽヽガア〳〵をやり出した。犬は面喰つて、わん〳〵と吠える。他のペンギンは、きよとんとして呆れて見てゐる。これを見てゐた人間は、いづれも腹を抱へぬはなかつたといふ。

最後に斷つておくが、ペンギンは南半球特有の動物であつて、最も多くゐるのは、南極圏内及び其の附近である。

（へちまのかは）

抱拘

捧腹絶倒　呵々大笑　噴飯　微笑　莞爾（カンジ）

目笑　巧笑　失笑　冷笑　嘲笑

櫻井忠溫　松山市の人、陸軍步兵大佐、陸軍省新聞班長。「肉彈」の著者。

臺（台）

二八　草に祈る

櫻井忠溫

私は望臺の中腹で、蛇のやうに山を卷いてゐる土壘の内側に立つた。そこが私の最後の地なのである。

右手を擊たれてから後、私は劍の鞘を捨て、拔身のまゝこの土壘を飛び越して、望臺へ驅け上つたのだつた。

氣も狂つてゐたらう。

昔はこゝも石山だつたが、今來て見ると、尺にもあまる草が延びはびこつてゐる。そして身の丈の倍もある松が黑い枝をひろげてゐる。何だか見知らぬ者が來て、屋敷跡へ坐つてゐるやうな氣がせんでもなかつた。血と肉で太れるだけ太り、延びられるだけ延びたやうに、その幹は鑄物のやうに固く、その葉は疊針のやうに鋭く見えた。

その恐ろしい荒くれものの中に、なよ〳〵とした一本の松が、私の立つ草の中に、今にも折れさうに佇んでゐる。そしてそのそばに實生の小松が一本かゞんでゐる。もし私の最後の地を記念するとしたら、このひよろ〳〵松が、私の血のあとから、淋しげに立つてゐる、それであらう。

何といふ淋しい姿だらう。震へながら、おびえながら立

延　延

つてゐる。

私の倒れたところは、少し窪んでゐたことも知つてゐる。

盤龍山より望臺を望む(作者寫生)

それがこの松の根もとから下に流れてゐる。

その窪みの中に一本の破帽額が咲いてゐる。ぐみの、實のやうな花が絲のやうな枝の先に赤くゆれてゐる。あたりの草の中に目をやると、ところどころに赤い頭を出してゐる。それが皆破帽額

向何

である。そして私の倒れたあとにも、その一本が惠まれてゐる。破帽額。さうだ、「吾も紅」に通じて、古戰場には相應しい名の草だ。私は全山血で浮いたこゝに、この草を見て、覺えず涙がにじむのであつた。

あの夜、私は望臺の上まであがつた。けれども山の左の背から逆襲をうけて、山をころがり落ちた。突劍もあるのだから、その時突かれたのだらう、何が何やらわからぬ中に、足をやられたので、崩れるやうにそこに倒れてしまつた。そこがこの松のところなのである。

そこへ又彈がいくらでも私の體の上に落ちて來た。見上げると、望臺の上の大きな大砲がニヨキツとして、頭の上

青村　關東廳の官吏にして作者の友人。青村はその俳號。

ズック　オランダ語Doekの轉といふ。

に「それ見ろ」といつた顏をして突き出てゐた。

青村は、木硯を出して墨をすり出した。何をするのかと思つてゐたら、「何か書き給へ。」と、いつた。私は何か書くどころの騷ぎでなかつた。青村の聲も、今はじめて耳に入つたのだつたかも知れなかつた。私は木のやうに立ちすくんでゐたから。

青村はズックの鞄の中から、便箋などを出して自分で何か書きはじめた。

この長い年月の間、こゝにあつた石もころげて谷へ落ちたであらう。上から〳〵と石が落ちて、又それが谷から谷へと落ちて行つたであらう。草も生えては枯れ、枯れては

この頃　作者が旅順包圍攻撃に參加して重傷を負ひしは明治三十七年八月二十一日なり。

生え、風も吹き、雨も降り、雪も散つたらう。

この間、二十三年といふ年が經つた。私を見覺えてゐる石があらうか。必ずやあらう。それが私の老いた姿を見て、何と思ふだらう。

それも丁度この月、この頃であつた。

「きり〳〵すが鳴くなあ。」と青村がいつた。きり〳〵すが鳴いてゐる。草から草へ鳴きつゞいてゐる。青村は「晝淋しといふ感じだな。夜よりもとりとめのない淋しさぢや。」と、しんみりとしていつた。

一びきのきり〳〵すが、ばねのやうに飛んだ。そして一

莖(茎)

本の草の莖につかまつて身輕く廻轉すると、靜かに長い後脚をひきよせた。

血は出流れに流れてゐた。石の上にも草の上にも流れただらう。その時、私はもう死ぬなと思つた。しかし死といふものがそんなに恐ろしいものに思へてゐなかつた。

喉がいりつくやうに乾いてゐたが、傷の痛みも何もなかつた。夢のやうなものを見てゐるかと思ふと、又はつきりし

最後の地(作者寫生)

幕幙

た。ゴム風船が膨んだり縮んだりするやうに、遠いところへ行くかと思ふと、又自分にかへつて來た。體がきれ〲になるやうにも思つた。

頭の上で何だかガサ〲してゐるものがあつた。土壘の中に、一人で四五挺の銃を持つて打つてゐた露兵がゐたが、それもどこへやら行つてしまつた。戰場にはもう人間の聲はしなくなつた。たゞ思ひ出したやうに鐵砲や大砲の音がした。

そのうち夜が明けはなれ、淺い霧の幕を張つた。土壘の中に死んだやうにうづくまつてゐたのが、ムク〲と動き出した。そして私のそばへ這ひよつて來た。

肩

それが近藤上等兵であつたのである。

私は上等兵に負はれて、土壘の外に出た。そしてそこにあつた外套で包まれた。又そこへ一人の兵がゴソ〳〵と寄つて來た。そして二人して私を山から引下してくれた。上等兵とは山の下で別れたが、もうそれきり逢はなかつた。それから間もなく私は何にもわからなくなつてしまつた。

今こゝに來て見ると、私をムツクリ引起して肩に負うてくれた姿が、あり〳〵と浮かんで來た。

私は、北の戰場まで行つて死んだ上等兵のために、草の上に靜かに祈つた。

盡（尽）

私は仰向けになつた。その時、さうしてゐたのであつた。空を見ると、松の葉を通して白いきれ〴〵の雲が靜かに動いてゐる。

青村は「君の代りに一句やつたよ。」といつて、便箋に書いたものを呉れた。見ると「二十有餘年一夢や草茂る」と、あつた。私は青村の句そのまゝを貰ひたかつた。二十有餘年、實に一夢である。

年古りた今日、こゝに古戰場を訪ねて、自分の倒れた場所を見たといふのは、私には言ひやうのない嬉しさと、又堪へがたい悲しさとであつた。

「皆死んでしまつた。」たゞこれだけで盡きてゐる。私は

鶴見祐輔　群馬縣の人、思想家、代議士。

起上つて草の上に默禱をつゝけた。

（草に祈る）

二九　障子

鶴見祐輔

日本の障子といふものについて、誰か面白い研究を發表してもらへまいか、と私は始終考へてゐる。

日本へ歸つて來て、うれしいものの一つは障子である。家のうちに坐つて、白い障子の紙を通して來る光線ぐらゐ心持のよいものは少い。晴れた日によく、雨の日によく、燈火をつけて後の夜は更

齋

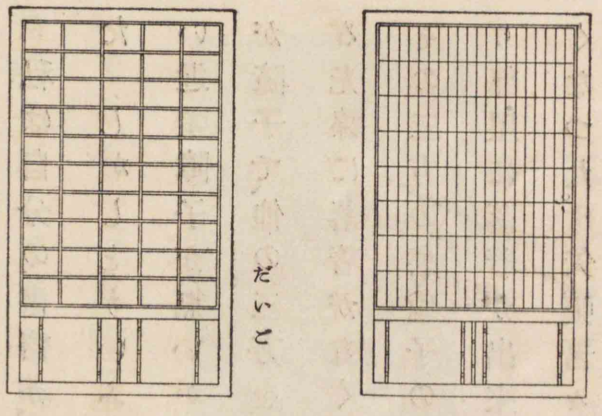
によい。

私は自分の書齋が、どうも氣が落着かないので困つてゐた。しかしどういふ譯とも知らずに五年ほど過した。つい近頃障子が無いからだと氣がついた。三方の一方だけが障子で、他の二方を磨硝子にしてあつた爲、机に落ちて來る光線に落着がなくて、さてこそ氣が落着かなかつたのだ。その二方の磨硝子のところへ障子をたてて見たら、すつかり部屋に落着が出來て、いくら書きものをしても草臥れなくなつた。

矢張吾々の先祖は、この風土と吾々の性情に適するやうな工夫を、住居の上にも凝らしてくれてゐたのだ。さうして私のやうな素人には解らないが、障子にはえら

棧淺

い種類があるもののやうだ。その部屋の工合と、仕事の種類で、障子の種類も變へるのがいゝであらう。縦に棧の細かい「たてしげ」や、醍醐障子といふ棧の太い素朴なのや、その好みによつて用ふるところを異にすべきであらうと思ふ。



障子の組方

日本の風景を美しくするものは、矢張この障子である。久方ぶりで日本に歸つて來て、灯ともし頃民家につくあかりを車窓より見渡す氣持といふ

枚牧

ものはない。四邊の風景が、白い紙に赤々とうつる燈火の色で軟いでくる。人影の障子にうつる様子などは、日本でなくては見られぬ情緒である。

その代り、冬時の寒さを凌ぐ裝置としては、これは又驚くほど不完全なものである。あるフランスの婦人が、はじめて日本家に冬住んで、「日本婦人は驚くべき人間だ。一枚の紙をもつて全宇宙と戰ふ。」といつたといふが、面白い觀方であると思ふ。

西洋人、殊にアメリカ人が日本へ來て羨ましがるのは、日本建築の白木造である。木を自然のまゝに出して使つてあるのが、たまらなく氣に入るらしい。それは日本人に次

良寛禪師　俗名榮藏、山本氏、越後國出雲崎の人、禪僧、詩歌を善くす、天保二年（約百年前）寂、年七十五。

いでは、木造の家を好むのはアメリカ人であるからだ。あるアメリカ人は、私の家へ來て、木の柱を幾度も撫でながら、「いゝなあ〳〵。」と子供のやうに羨ましがつた。

私は今日の日本が、美しい日本趣味を次第に失ひつゝあることを悲しむ。しかしそれも風雅な日本趣味の代りに、純粹な西洋藝術が入るのなら、なほ慰むるところもあるが、アメリカ新開地に見るやうな、安い俗悪な文化住宅であるのは、日本の近代化のあまりに高價であることを思ふ。

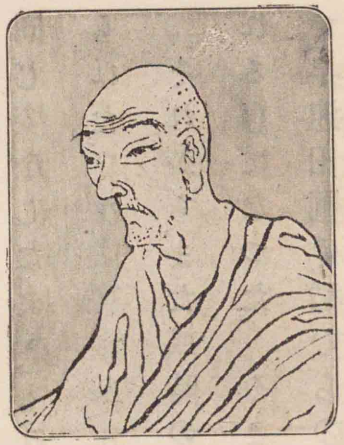
（中道を歩む心）

三〇　良寛禪師

北原白秋

聖心は童の心である。

瞑冥



良寛禪師

越後の良寛禪師は、殊にこの童心の持主であつた。かういふ話がある。

一に童男童女、二に手毬、三におはじき、これが禪師の三好といふ。これで見ても、良寛樣がどんなに子供が好きで、子供たちと遊ぶ事が、又どんなに嬉しかつたかといふことがわかる。

或時、例の通り子供たちと、かくれんぼをしてゐられた。鬼になつた良寛樣が、目を瞑つて、「もういゝよ。」といふかはいい聲を一心に待ちうけてゐられる。と、丁度日のくれどきで、子供心の何がな欲しくなる時である。家々の燈がちら

姿（姿）

ちら點き出すと子供たちは急に遊びをやめて、一人のこらずこそ〳〵と歸つてしまつた。そこは子供だから、良寛様も何もうつちやらかしてある。無論、いくら待つても「もういいよ。」といふものはない。そのうちに日が暮れ、長い夜が來た。さうしてとう〳〵夜が明けてしまつた。良寛様は、それでも一所懸命だ。心から目を瞑つて、やはり同じ處に同じ姿をしたまゝ「もういゝよ。」と子供が呼ぶのを待つてゐられた。

それから、また或時のことである。良寛様が、今度はかくれる事になつた。そこで、見つけられては大變だといふので、早速田圃の稻むらの中にもぐり込んで、それは〳〵小さくなつて、まるで二十日鼠見たいに、頭からすつぽりと稻藁をかぶつて、おど〳〵してゐられた。すると子供たちは、また例の通り一人のこらずこそ〳〵と歸つて了つたのである。それを良寛様は少しも御存知がない。また日が暮れて夜が來て、また夜が明けた。

稻村には霜が眞白に置き、朝の日がのぼり始めると、百姓がやつて來て、何の氣もなく稻たばを、やにはにはづすと「おやつ」と驚いた。良寛様が小さくなつてゐる。「おや良寛様が」と云ふと慌てゝ「そつとしろ、そつとしろ、子供が見つける。」

禪師の玉のやうな此の童心は、榮藏と云つた童の昔その

榮（栄）

悄　稍

儘である。それは何物にも代へ難い、二つとない尊い天稟である。

まだ榮坊が八歳の頃だつたといふ。ある日父親からひどく叩かれたので、つい上目をした。そこでまた叩かれた。「親を睨むやうな奴は鰈になるぞ。」これを聞いた良寛様の榮坊は、外へ出て行つたが、日が暮れても歸つて來ない。さあ、家内中大心配で、あちらこちらと捜し索めると、或濱邊の岩の上に、悄然と佇んで、沖の方ばかり眺めて居た。「榮坊、どうした。」と云ふと榮坊曰く「おれは、まだ鰈にならないか。」

鰈になると云はれたので、ほんとに鰈になると思つて、一心に海を視つめてふるへて居た童心の正直さ。これをこ

賭　睹

恥（耻）

そ生一本といふのであらう。童を欺く大人こそ禍である。

また或日のことである。その良寛様が男の兒や女の兒達とお彈きをしてゐられた。沙門良寛全傳に「禪師頗る大勝を博して賭物の熬豆を多く得。」と書いてあるから、餘程の乘氣であつたらしい。丁度其の時、誰れかがはいつて來た。そして「おや／＼、良寛様、なか／＼あなた様はお彈きがお上手で。」と褒めると、罪がないこと、良寛様はぼうつと面を赤くすること、さも／＼恥かしさうに、そつとその熬豆を膝の下に押隱したといふ。その心の初々しさ。そのきまりのわるさ、恥かしさは、全く佛の前に子供らしく、おとなしく、身を遜る心である。尊い聖心は凡てこの童心を源にする。

嚙（噛）

禪師が如何に天眞爛漫であつたかといふことを、もう一つお話する。

或時、赤々と實が熟れて鈴なりになつた柿の木の下で、小さな子供が一人泣いてゐた。良寛樣が通りかゝつて、どうしたんだと圓い頭を撫でてやると、あの柿が食べたいといふ。よし／＼、それではわしが取つてあげる。泣くんでないぞ、と言ひながら、やつとこさと木の上に匍ひ上つた。枝につかまつて、あれかこれかと探してゐる内に、それは全くうまさうな柿の實だ、一つ取つて口をつけると、それがおいしいのなんの、良寛樣は夢中になつて嚙るは／＼、まるで猿蟹合戰の赤いお猿のやうに、むしや／＼と食べ惚れてゐる。

下にゐる子供こそ哀れである。それを見て火のやうに泣叫ぶと、始めて良寛樣氣がついた。さあ、しまつた、これは、といふので慌てて枝を搖つたといふ話。思うてもその慌て方のをかしさ、罪のなさ、眞正直さ。その子供らしさ。全く涙が零れるほど嬉しいではないか。（洗心雜話）

霞立つながき春日を子供らと手鞠つきつゝ今日も
暮しつ

のみしらみ音に鳴く秋の蟲ならばわがふところは
武藏野のはら

世の中にまじらぬとにはあらねどもひとりあそび
ぞわれはまされる

（良寛和尚）

森鷗外
名は林太郎、島根縣の人、醫學博士、文學博士。大正十一年歿。年六十三。

安井息軒
名は衡、通稱仲平、息軒と號す。德川末期の大儒。

烟畑

三一　安井息軒

森　鷗外

「仲平さんはえらくなりなさるだらう。」といふ評判と同時に、「仲平さんは醜男だ。」といふかげごとが清武一郷に傳へられて居た。

仲平の父は日向國宮崎郡清武村に二段八畝程の宅地があつて、そこに三棟の家を建てて住んでゐる。財産としては、宅地と少し離れた處に田畑を持つてゐた。年來、家で漢學を人の子弟に敎へるかたはら、それを耕作してゐたので

飫肥藩
伊東氏。五萬七千石。日向國南那珂郡飫肥はその城下。

ある。併し仲平の父は三十八の時江戸に修行に出て、中一年置いて、四十のとき歸國してから、段々飫肥藩で任用せられるやうになつたので、今では田畑の大部分を小作人に作らせることにしてゐる。

仲平は次男である。兄文治が九つ、自分が六つの時、父は兄弟を殘して江戸へ立つたのである。父が江戸から歸つた後、兄弟の脊丈が伸びてからは、二人とも毎朝書物を懷中して畑打に出た。そして外の人が煙草休をする間、二人は讀書に耽つた。

父が始めて藩の敎授にせられた頃の事である。十七八の文治と十四五の仲平とが例の畑打に通ふ道で行逢ふ

輕（軽）

人がみな言ひ合せたやうに二人を見較べて、連があれば連に何事をか囁いた。脊の高い、色の白い、目鼻立の立派な兄文治と、脊の低い、色の黒い、片目の弟仲平とが、いかにも不釣合な一對に見えたからである。兄弟同時にした疱瘡が、兄は輕く、弟は重く、弟は大痘痕（あばた）になつて、剰へ右の目が潰れた。父も小さい時、疱瘡をして片目になつてゐるのに、又仲平が同じ不具になつたのを思へば、「偶然」といふものも殘酷なものだと云ふ外はない。

仲平は兄と一しよに歩くのを辛く思つた。そこで朝は少し早目に食事を濟ませて、一足先に出、晩は少し居殘つて仕事をして、一足遲れて歸つて見た。併し行逢ふ人が自分の方を見て連と囁くことは止まなかつた。それはかりではない、兄と一しよに歩く時よりも、行逢ふ人の態度は餘程無遠慮になつて、囁く聲も常より高く、中には聲を掛けるものさへある。

「見い。けふは猿がひとりでゆくぜ。」

「猿が本を讀むから妙だ。」

「なに、猿の方が猿引よりはよく讀むさうな。」

「お猿さん。けふは猿引はどうしましたな。」

交通の狹い土地で、行逢ふ人は大抵識り合つた中であつた。仲平は一人で歩いて見て、二つの發見をした。一つは、自分がこれまで兄の庇護の下に立つてゐながら、それを悟

囁　攝　庇　疵

誰

唯

篠崎小竹　名は弼、大阪の人、江戸時代末期の儒者。

らなかつたといふ事である。今一つは、驚くべし、兄と自分とに渾名が附いてゐて、醜い自分が猿と云はれると同時に、兄までが猿引と云はれてゐるといふ事である。仲平はこの發見を胸に藏めて、誰にも話さなかつたが、その後は强ひて兄と離れ〳〵に田畑へ往返しようとはしなかつた。

仲平に先だつて、體の弱い兄の文治は死んだ。仲平が大阪へ修行に出て、篠崎小竹の塾に通つてゐた時に死んだのである。

仲平は二十一の春、金子十兩を父の手から受取つて淸武村を立つた。そして大阪土佐堀三丁目の藏屋敷に着いて、長屋の一間を借り、自炊をしてゐた。儉約の爲に、大豆を鹽と醬油とで煮て置いて、それを飯の菜にしたのを、藏屋敷では「仲平豆」と名づけた。中一年置いて、二十三になつた時、故郷の兄文治が死んだ。學殖は弟に劣つてゐても、才氣の鋭い若者であつたが、病氣がちで、とう〳〵二十六歳で死んだのである。仲平は訃音を得て、すぐに大阪を立つて歸つた。

その後仲平は二十六で、江戸に出て、古賀侗庵の門下に籍を置いて昌平黌に入つた。後世の註疏に據らずに經義を究めようとする仲平のためには、古賀より松崎慊堂の方が、懷かしかつたが、昌平黌に入るには、林か古賀かの門に入らなくてはならなかつたのである。痘痕があつて、片目で、脊の低い田舍書生は、こゝでも同窓に馬鹿にせられずには濟

古賀侗庵　名は煜。肥前の人。幕府の儒官。

松崎慊堂　名は復。肥後の人。掛川藩の經學者。

林　世々幕府の學政を掌れる家。

柱注住

まなかつた。それでも仲平は無頓着に默り込んで、一人讀書に耽つてゐた。座右の柱に、半折に何やら書いて貼つてあるのを、からかひに來た友達が讀んで見ると、

今は音を忍が岡のほとゝぎす
いつか雲井のよそに名のらん

と書いてあつた。「や、えらい抱負ぢやぞ。」と友達は笑つて去つたが、腹の中ではやゝ氣味惡くも思つた。これは十九の時、漢學に全力を傾注するまで、國文を

安井息軒

殘(残)

も少しばかり研究した名殘で、わざと流儀ちがひの和歌の眞似をして、同窓の揶揄に酬いたのである。

仲平はまだ江戸にゐるうちに、二十八で、藩主の侍講にせられた。そして翌年藩主が歸國せられる時、供をして歸つた。その年の正月から清武村中野に藩の學問所が立つことになつて、工事の最中であつた。それが落成すると、六十一になる父滄洲翁と、昨年江戸から藩主の供をして歸つた二十九になる仲平さんとが、父子共に講壇に立つ筈である。江戸がへり昌平黌じこみと聞いて、「仲平さんは偉くなりなさるだらう。」と評判する郷里の人達も、痘痕があつて、片目で、脊の低い男振を見ては、「仲平さんは醜男だ。」とかげご

とを言はずにおかなかつた。

大儒息軒先生として、その名を知られるやうになつたのは、浦賀へ米艦が來て、天下多事の秋となつた仲平が四十八の頃からである。（鷗外全集）

○

わりなしや人こそ人といはずともみづから身をや思ひすつべき　紫式部

○

あすもまた朝とく起きてつとめばや窓にうれしき有明の月　僧涌蓮

三宅雪嶺　石川縣の人、名は雄次郎、文學博士。

爭（争）

三二　好きで勉強

三宅雪嶺

何がよいと云うて、好きで勉強するほどよいことはない。「好きこそ物の上手なれ」とは、寔に爭ふべからざることである。「下手の横好き」と云つて、幾ら好きでも上達せぬのがあるが、これは好きではあるが勉強しないからである。單に好きと云ふだけではあてにならぬ。

勉強といふことは、文字の示す通り、勉めるのであり、强ひるのである。面白をかしく好きにするのとは違ふ。必要とあれば如何なる苦痛にも堪へると云ふ所がなくてはならぬ。つまり精神を打込む所がなくてはならぬ。好きと

棊・棋・碁

いふので、唯好きの儘にしてをつては、上達のしやうがない、上達しても知れたものである。碁に上達するには、碁が好きと云ふことを肝要な資格とする。嫌ひでは致方がない。併し好きであると共に、好きな道に勉強を厭はぬといふ所がなくてはならぬ。

兎角、好きと勉強とは矛盾する傾がある。たゞ好きであつて、勉強する位ならいやだと云ふのがある。勉強が嫌ひで、勉強を要するが爲に好きが嫌ひになるものもある。併し好きと勉強とが、いつでも斷う分離するといふのでなく、全く合同するのもある。好きだから、幾らでも勉強しようとする。これはいくら質が悪くても、屹度何程か上達し、若

憺澹擔膽

し少しでも質が良ければ、何處まで上達するか量り知られぬ。好きで苦心慘憺を辭せぬとあれば、最早占めたもので、前途は希望に充ちてをる。好きと嫌ひとは正反對であるが、初め嫌ひであつた事でも、大いに勉強すれば必ず大いに上達する。何事によらず、若し好きであつて、大いに勉強するといふやうであれば、天の與へた賜と看做して差支ない。實に仕合せ者である。種々の學科を修める中、好き嫌ひがある。普通學として、どれでも皆修めねばならぬが、その中に好きで勉強することの出來るものがあれば、これ即ち將來身を立てるに、最も與つて力あるべきものである。

好きと云つても、少し許り讀むと云ふ位では分らぬ。愈、

努弩怒　解(解)

專門として見て嫌ひになるかも知れぬ。好きであつて、專門にする時、愈、深入りして、愈、好きになるといふのは、上達が目の前に見えてをる。たゞ好きと云ふだけでは、我が才能を伸ばし得るとは限らない。

自分が好きであるから、我が天才の存する所であると考へて、うか〳〵してをれば、たゞ月日の經つばかりである。好きであつて、然もよく勉强し、好きな道に何處までも努力するといふのが、眞に誂へ向である。

天才に於ける天分と努力との比例は、何程であらうか。中には、殆ど全く天分なくして、天才と同樣の結果を得た者も少くない。天才を解して、好きで勉强する者とするのは、中らずと雖も遠くはない。

如何なる天才でも、全く勉强せぬのはない。彫刻でも繪畫でも音樂でも、天才と知られるには、實に努力の上に努力し、努力に於て到らざる所がない。而して彼等は、唯目的を達するが爲に、いやな勉强をしたのかと云へば、さうでない。いやな勉强したのでなく、好きで勉强したのである。好きでいやな事をしたのである。

好きでいやな事をする者は、能く事業を成し遂げ、大事業を成し遂げることが出來る。好きで勉强し得るならば、自分に天職が與へられたものと感謝して、大いに努力すべきである。

(內實の力)

國語讀本 卷一 終

小田正己

昭和四年三月廿五日
文部省檢定濟
中學校國語科用

昭和改訂版 國語讀本

卷數	定價	昭和五年度臨時定價
一、二、三	各金四十七錢	金七十七錢
五、六、八	各金四十六錢	金七十五錢
七、九、十	各金四十五錢	金七十三錢
四	金四十四錢	金七十二錢

大正十三年十二月十六日印刷
大正十三年十二月十九日發行
大正十四年二月廿一日訂正再版印刷
大正十四年二月廿四日訂正再版發行
昭和三年十一月一日改訂印刷
昭和三年十一月四日改訂發行
昭和四年三月十七日改訂再版發行
昭和五年二月十八日改訂六版發行

不許複製
上田

編者 上田萬年
同 榮田猛猪
同 鹽野新次郎
印刷兼發行者 株式會社 啓成社
右代表者 布津純一
東京市芝區芝浦町二丁目三番地
印刷所 日進舍

發行所
東京市京橋區加賀町一番地
株式會社 啓成社
電話銀座(57)二四九四番
振替東京一二〇五五番

甲
山陽中學校
小田正己